「ポスト・トゥルース」時代のポー

―19 世紀と 21 世紀のメディアを比較して考える―

コース　国際文化コース
学籍番号　１４０５９７
氏名　舛田　勇也
指導教員　中谷　崇

都市が発達し、出版産業が発展していかがわしい言説が流布した 19 世紀に、自らを「マガジニスト」と呼び、作家兼雑誌編集者として活躍したエドガー・アラン・ポーの作品を読み直すことで、「ポスト・トゥルース」という言葉で表される 21 世紀のメディアの混乱を一味違う視点から考察する。産業革命が都市生活者の暮らしと価値観を変えた 19 世紀は、情報革命が私たちの生き方、考え方を激しく揺さぶっている 21 世紀とよく似た混乱の時代だった。それならば、19 世紀の社会とそこで語られた言説を考察することで、現代の混乱を読み解くヒントを得ることができるはずだ。

序論では、個人が情報の発信者となれるネットメディア全盛の現代に、19 世紀を「マガジニスト」として生き、メディアの一翼を担ったポーの作品を読み直すことの意義を確認する。

第一章では、19 世紀にマスメディアがどのようにして登場し、人々の生活をどのように変えてしまったのか考える。以降の議論で 19 世紀と 21 世紀を比較しながら考察するための前提となる知識の提示を目的とする。

第二章では、ポーの作品の中でひとつの転換点となる「群衆の人」(1840 年)を取り上げ、作家としてのポーが、都市を観察するジャーナリストとしてのポー自身を捉えるに至った過程を考察する。具体的には、「群衆の人」の中で老人が歩き廻った経路を地図上でたどり、老人を追う語り手の往来の描写が大都市ロンドンのルポルタージュになっていることを根拠に、作家ポーのジャーナリスト的な側面を指摘する。

第三章では、ポーの作品群の中から 5 つの作品を取り上げ、彼が表象しようと試みた 19 世紀の姿を多面的に考察する。取り上げる 5 つの作品は、中世風の屋敷が崩壊していく様が近代化を想起させる「アッシャー家の崩壊」(1839 年)、伝染病から逃れるために城にこもって踊り続ける貴族たちの狂気を描いた「赤き死の仮面」(1842 年)、酒浸りの男の狂気をホラーに仕立て上げた「黒猫」(1843 年)、アメリカで実際に起こった殺人事件（メアリー・ロジャース事件，1841 年）を題材にしてその真相に迫った連載作品「マリー・ロジェの謎」(1842-1843 年)、『サン』紙に本当にあったことの記事のようにして掲載されて評判を呼んだ「軽気球夢譚」(1844 年)だ。これらの作品の考察を通して、近代化に伴って人々の関心が迷信や古い屋敷への抽象的な恐怖から、伝染病やアルコール中毒への恐怖、最新技術への興味といった具体的な対象へ移行していったことを指摘する。

第四章では、視点を現代へと戻し、これまでの議論を踏まえて「ポスト・トゥルース時代」を再考する。中世から近代への移行とそれに伴う人々の暮らしや社会通念の変化を見てきたことで、現代のパラダイムシフトをより客観的に捉えることができるだろう。アルビン・トフラーの「第三の波」や境屋太一の「やさしい情知」を引用し、今起こりつつある変化を把握する。また、そうした社会の変化に伴う社会不安の増加に対して文学がどのような役割を担ってきたかを考える。

結論では、ネットメディアが発達し、個人がメディアの役割を担えるようになった現代において、「不安」を「面白さ」に転化するポーの観察者の視点を個々人が持つことの重要性を指摘する。

全体を通じて、現在の情報の混乱は 19 世紀のメディアの黎明期に見られた言説の混乱と類似した現象であり、人々の「新しさ」に対する不安を「面白さ」に転化できる（19 世紀における小説のような）表現形態が現れるまでの途中段階であることを意識させられるように配慮する。

2017 年度卒業論文

「ポスト・トゥルース」時代のポー

19 世紀と 21 世紀のメディアを比較して考える

横浜市立大学
国際総合科学部　国際総合科学科
国際文化コース
学籍番号　１４０５９７
舛田　勇也

提出日
2018/01/09

≪目次≫

序論　ポーの作品を読み直す今日的な意味・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第一章　19 世紀のマスメディア
1.1 都市に生まれた出版産業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
1.2 マスメディアの黎明期には現代と似た混乱があった・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
1.3「ナウさ」を志向する新しい言説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
1.4「ハサミとノリ」でコラージュされた言説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
1.5「truth」（真実）と「fact」（事実）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
1.6「ポスト・トゥルース時代」のネットメディア ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
1.7「いかがわしさ」の時代をマガジニストとして生きた作家ポー ・・・・・・・・・・・・11

第二章　「群衆の人」を追え
2.1 あるのは地図と想像力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
2.2 追跡　「群衆の人」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
2.3 推理　大都市ロンドンを観察する遊歩者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
2.4 個人の秘密を読もうとする語り手・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
2.5 老人とオーギュスト・デュパン　「群衆の人」から「モルグ街の殺人」へ・・・・・・19

第三章　ポーの作品群から読む 19 世紀
3.1「アッシャー家の崩壊」　「ゴシック」から「モダン」へ・・・・・・・・・・・・・・・21
3.2「赤き死の仮面」　ペストの恐怖をエンタメに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
3.3「黒猫」　酒浸りの狂気と自己嫌悪の文学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
3.4「マリー・ロジェの謎」から読むメディアリテラシー・・・・・・・・・・・・・・・・23
3.5「軽気球夢譚」はフェイクニュースか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

第四章　「ポスト・トゥルース」時代　再考
4.1「真実」よりも「信じたいウソ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
4.2 トフラーの予言 「第三の波」によるパラダイムシフト・・・・・・・・・・・・・・・29
4.3「モノ不足、情報余り」の現代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
4.4 価値観の変化 「今」に対する違和感と嫌悪感の正体・・・・・・・・・・・・・・・・32
4.5 不安の受け皿としての文学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
4.6 あたらしい不安　「ヒト不足」の時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

結論　ポーの目を借りて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

序論　ポーの作品を読み直す今日的な意味

エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)は 1809 年 1 月 19 日、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンに、女優エリザベス・ポーと俳優デイヴィッド・ポーの息子エドガー・ポーとして生まれた。幼くして母を失くし、父も行方知れずとなったポーは、養父ジョン・アランにひきとられ、6 歳から 11 歳までをロンドンで過ごした。養父は成功した商人で、ポーはロンドン郊外の寄宿学校に通うことができた。帰国後、ヴァージニア大学(University of Virginia)に通うことになった彼は、そこで借金を抱えるほどギャンブルにはまってしまう。厳格な性格の養父とはこのころから仲が険悪になり、結局養父が亡くなるまでその確執は続いた。

ポーの作品の中に、集団に属さない観察者としての語り手が多く登場するのは、自らの幼少期に、孤独な「外国人」として都市の人々を眺めていた経験があるからだろう。たとえば、第二章で取り上げる「群衆の人」という作品でポーは、病気の療養のためロンドンに滞在する語り手の視点を借りて、大都市ロンドンの大通りにあふれかえる多種多様な人々や、怪しい明りで満ちた夜の繁華街を鮮やかに描写してみせた。この描写を可能にしたのは、都市の集団に属さない（属せなかった）観察者の視点だ。そしてそれは、都市生活を「あたりまえ」の日常としている人には得ることのできない視点だった。

また、ポーが作家としてキャリアを築いた当時のアメリカは、イギリスと比べれば産業的にはまだまだ発展途上の国であったことも忘れてはならない。都市化の進み具合が違う両国で過ごした経験があるからこそ、ポーはロンドンを魅惑的な空間として描きだすことができたし、読者も新鮮な驚きを持って彼の作品を読むことができた。夜も明るい都市など見たこともない当時のアメリカの読者が「群衆の人」で描かれるロンドンに驚嘆する姿を想像するのは難しくない。

ポーは都市に暮らしながらも、集団に属さない「観察者」の視点を失わなかった。彼は、幼少期には「外国人」として、それ以降は詩や小説の「作者」または雑誌を編集する「ジャーナリスト」として、常に集団を眺める「観察者」であり続けた。だからこそ彼は都市の人々の興味関心の変遷に意識的であることができたし、自分の作品が人々にどのように受容されるかを常に考え創作を行うことができた。都市を観察し、都市の人々を魅了する作品を作りたいという彼の想いは、後に世界初の探偵小説「モルグ街の殺人」と、探偵Ｃ・オーギュスト・デュパン[1](C. Auguste Dupin)を生み出すことになる。

自分が発信した情報がどのように受容されるかについて、意識的であること。メディアが成熟しきっていない 19 世紀においてそれは、作家とジャーナリストと一部の著名人が気にしていればよいことだった。しかし、ネットメディアが発達し、すべての個人が情報の発信者となれる現代、メディアに対する向き合い方はすべての人にとって重要な問題となっている。本稿でポーを取り上げるのは、彼が 19 世紀の時点ですでに自分の作品の受容のされ方

[1] 「モルグ街の殺人」の登場人物。探偵。

に意識的な作家であっただけでなく、作品が載る雑誌の編集者でもあったからだ。作家とジャーナリストの両方の顔を持った彼のメディアとの向き合い方を考察することで、ネットメディア全盛の現代に暮らす私たちのメディアリテラシーを問い直したい。

19 世紀がマスメディアの時代だとするなら、21 世紀はネットメディアの時代だといっていいだろう。現在、先進国の多くの人々はパソコンやスマートフォンなどの端末を利用して、毎日たくさんの情報を取得している。人々は情報を得るだけでなく自らもネット上で情報を発信・拡散するので、ネットは情報であふれかえっている。メディアが新聞社や小説の作者、テレビのニュース番組だけでなく、「私たち」一人ひとりにとって開かれた社会、それが 21 世紀の高度情報化社会だ。インターネットの急速な発達は、双方向的な情報交換の流れを加速し、社会の在り方を根本から変えてしまうような変革をもたらした。アルビン・トフラー(Alvin Toffler)は著書『第三の波』(*The Third Wave*,1980 年)の中で、インターネットの発達による情報革命（「第三の波」）は、200 年前に起こった産業革命（「第二の波」）や約一万年前に起こった農業革命（「第一の波」）に匹敵する社会の変革であると宣言した。それだけでなく彼は、今日人々を悩ませる社会問題のほとんどすべては、これまで世界を支配していた「第二の波」が後退をはじめ、打ち寄せる巨大な「第三の波」とぶつかり合うことで生じているとまで述べている。

> 第三の波は、あらゆる人の足元をすくう。家族を引き裂き、経済を揺り動かし、政治制度を麻痺させ、われわれの価値体系をめちゃめちゃにするだろう。それは古くさい権力機構にぶち当たり、今日すでに揺らぎつつあるエリートの特権と特典を危うくし、あすの権力闘争のための舞台をしつらえる。[2]

まさに現在の家族観の変化、世界的不況、ポピュリズムの隆盛を予言するような文章である。これらの諸問題がどのように情報革命と関連しているのか、詳しくは第四章の考察に譲るが、これで、本稿でなぜ 19 世紀の作家エドガー・アラン・ポーを取り上げるのかがより明確になるだろう。

「第二の波」が押し寄せ、都市に住む人々の暮らしや価値観が一変した 19 世紀。

「第三の波」が迫り、これまでの社会通念が通用しなくなってきている 21 世紀。

どちらの時代も技術の進展によって社会のあり方が変化し、それと同時に人々の考え方や行動原理も一変した。現代に生きる私たちが高度経済成長期の「仕事に人生を捧げる」生き方に共感できないのと同じように、産業革命以後の都市に住む人々（近代人）は、中世の厳格な戒律や迷信に縛られて暮らす、それ以前の人々の価値観を理解することが難しくなってしまった。産業革命は、人々の考え方まで合理化・効率化優先にしてしまったのだ。社会がこうした「引き返せない楔」を経験した後では、必ず社会不安と情報の混乱が発生する。そういった意味で 19 世紀と 21 世紀はよく似た時代だ。二つの時代を比較することで、押し寄

[2] トフラー『第三の波』pp.27-28

せる変革の類似点と相違点を浮かび上がらせることができるだろう。

「第三の波」（情報革命）は、人々に便利さを与えると同時に、コミュニケーションや情報伝達にかかる時間をほとんどなくしてしまった。20 世紀後半に登場したインターネットはそれまでとは比べ物にならないほどの量の情報交換を可能にした。遠距離であっても一瞬で情報が伝達されるため、コミュニケーションの輪はかつてないほど大きくなった。20 世紀末にはグローバリゼーションの名の下にインターネットのよい面ばかりが強調された。しかし、21 世紀に入って、SNS などのソーシャルメディアの発達を経て情報量は把握不可能なほど膨大になり、流通網はさらに巨大化・複雑化した。情報の出所を把握するのが難しくなった結果、個人の主観的な「面白いかどうか」の判断基準で拡散された「いかがわしい情報」（＝フェイクニュース）が広まってしまうようになった。

情報を「物」と捉えて、生産・流通の観点から考えてみる。

ひと昔前ならインターネット上にある情報を「消費」しているだけであった「私たち」（作家でもジャーナリストでもなく、有名人でもない人々）は、SNS の発達などによって情報を「生産」し、「流通」させられるようになった。そして、生産者が増えたことで情報の流通量は何倍にも増加した。

また、「私たち」は、それぞれが情報の基点となり、互いにつながり合う複雑で巨大な流通網を形成するようになった。情報が次々に伝わってゆく過程で、発信源はあいまいになり、情報の真偽を確認することは困難になった。どんな情報を「生産」し「流通」させるかを決めるのは「私たち」なので、そこで流通する情報の大部分は、必然的に多数の人にとって「役に立つ」か「面白い」ものとなった。ときには「面白い」だけで内容のないもの、それだけでなく事実と異なっている情報までもが、「私たち」を媒介にして広まってしまうようになった。

こうして、「私たち」が情報の媒介者（メディア）となったことで、一生かかっても消費できない量の情報が流通するようになったのと同時に、情報の整理が不可能なほど流通網が複雑化・巨大化し、中身がない情報、うその情報が出回るようになった。

もちろん、「いい情報をみんなと共有したい」という気持ち自体は悪いものではないし、人間が社会を作って生きていくときに必要な性質・能力であると思う。だが、そうした人間の本質に根差した情報共有の行動が、自覚的でないばかりにコミュニケーションを混乱させ、「ポスト・トゥルース(post-truth)」と呼ばれる今日の混乱を生み出してしまっていることもまた事実だ。

そうはいっても、今、現に起こりつつある現象を客観的に考察するというのはけっこう難しい。私たちはどうしても現代の価値観のなかでものごとを捉え、考えてしまうからだ。そこで本稿では、前述の「観察者の視点」を備えた作家ポーと、彼の生きた「マスメディアの黎明期」（＝19 世紀）を補助線に引く。

19 世紀は、都市化が急速に進み、都市に集中した人々の「知りたい」という欲求を背景に新聞や雑誌などの情報産業が発達した時代だ。流行りのファッションが華々しく雑誌の表紙を飾り、新聞には商品の派手な宣伝広告が挟み込まれた。人々は紙面をにぎわせる有名人

のゴシップや噂話、話題になった出来事などについての記事を楽しんだ。こうして、人々は流行を追うために新聞・雑誌をこぞって読むようになった。今でいえば「あたりまえ」のこの光景は、大都市成立以前の古い共同体ではありえなかった。誰もが顔見知りで、個人の秘密（プライベート）の存在しない小さい共同体では、「知りたい」という欲求自体が生まれないからだ。

現代と似た情報社会ができつつあった 19 世紀だが、このときの情報の発信者は新聞社や雑誌社、作家などの大きな組織または名を挙げた個人だった。情報の発信者が特定できるという点で、19 世紀の情報流通は 21 世紀のそれより把握しやすいだろう。19 世紀の情報産業について、詳しくは第一章で論じる。

そんな 19 世紀の言説の担い手の中でも、ポーは都市化による人々の関心の変化に特に意識的な作家であった。彼の初期の作品は、人里離れた古いお城で起こる不思議な出来事などを題材にしたゴシックホラー的な作風であったが、次第に作品の舞台に実在の場所や都市を選ぶようになった。そうした変化の中で、都市に住む人々の不安や興味のある物事など、ジャーナリズム的なテーマに迫っていくことになる。具体的には、大都市で起こる猟奇的な殺人事件の真相を暴く探偵小説の先駆け的な「モルグ街の殺人」(1843 年)や、当時人々の話題をさらった機械仕掛けの将棋指し人形の正体に迫った「メルツェルのチェス・プレイヤー」(1836 年)などの作品だ。

彼の作風の変化はどのようにして起こったのか。筆者はその契機となった作品を「群衆の人」(1840 年)だと考えている。詳しくは第二章で論じたい。

ポーはまた、自分の作品を載せる媒体である雑誌の在り方にも強いこだわりを持っていた。小説はそれ自体として完結したものではなく、どこで、どのように、どんな作品と一緒に読まれるかによって印象が変わってしまうものであることを知っていた彼は、自身の雑誌を創刊することを生涯の夢とした。ロマン派と呼ばれる、「不朽の名作」を志向する作家たちが名声を得ようとこぞって作品を発表していた 19 世紀において、彼の作品に対する姿勢はあまりにも先進的だった。

そのためかどうか、ポーの作品はアメリカの文壇から長い間正当な評価をしてもらえなかった。今でこそ後の作家たちのリスペクト[3]もあってアメリカ文学史に名を残すポーだが、当時アメリカの文壇で大きな力を持っていたラルフ・ウォルドー・エマソンは、彼を単なる‘jingle man’にすぎないと切り捨てた[4]という。そのいっぽうで、同時代のフランスの詩

---

[3] たとえば、現代アメリカの作家ポール・オースター(1947－)は、彼の初めての長編小説のひとつ『ガラスの街』(*City of Glass*, 1985)の中で、ポーの著作「群衆の人」と同じように、語り手が都市を徘徊する老人を追跡して法則を導き出そうとする場面を描いた。それほどまでにポーの影響を受けているのだろう。

[4]渡辺利雄は、『講義　アメリカ文学史　入門編』で以下のように書いている。

> ポーは、現在も全世界で広く読まれ、研究の対象とされる 19 世紀アメリカ有数の詩人、短編小説家、批評家であり、歴史的に彼は稀にみる天才(genius)として高く評価されてきた。しかし、その一方で、彼を単なる「山師」(charlatan)であるとして憚(はばか)らない人たちも少な

人・評論家であるシャルル・ボードレールはポーの作品に惜しみない賛辞を贈った。ポーの評価を巡っては評価する人物の文学に対するスタンスによって意見が両極端に分かれることが多いようだ。

いずれにせよ、ジャーナリズムの時代を己の筆才だけで生きようとしたポーは、当時の言説の有り様について常々意識的だった。「いま人々の関心はどこにあるのか」「どんな作品を書けば、人々は読みたいと思うのか」をおさえながら、「文学的に価値のある」作品を書くことも決してあきらめようとしなかった彼の作品群は、ときにいびつな印象を与えられることもあるが、不思議に惹きつけられる魅力を今も備えている。彼の作品の文学性と、当時としては珍しいエンターテイメント志向の題材のとり方について、詳しくは第三章で考察する。

本稿では、先見の明をもった作家ポーの作品を読み直し、彼の都市を見つめる鋭敏な視線を借りて、21 世紀の高度情報社会を再考する。ポーが意識的であったように、人々の関心を捉えるのは好奇心を掻き立てる読み物、つまり多くの人が読めるくらいわかりやすくて面白い文章だ。本稿も、なるべくわかりやすく、面白い文章になるよう心がけたい。

混沌とした 19 世紀の情報産業、ポーの奇妙な作品群への考察、21 世紀のポー的問い直しのそれぞれが、現代に生きる私たちに重要な示唆を与えてくれるはずだ。

からずいる。[…]Ralph Waldo Emerson[…]は、彼を単なる‘jingle man’にすぎないと切り捨てた。(渡辺利雄『講義　アメリカ文学史　入門編』pp.52-53)

第一章　19 世紀のマスメディア

1.1 都市に生まれた出版産業

まず、ポーが小説を書いた 19 世紀の出版産業がどのような状況だったのかを簡単に確認する。

19 世紀は、18 世紀後半から続く産業革命の波（「第二の波」）が一般の人々の生活にまで及んだ時代だ。街にはガス灯が並びはじめ、昼も夜も活気のある往来をもつきらびやかな都市が生まれた。鉄道がそんな都市と都市を結び、大きな都市にはさらに多くの人や物が集まるようになった。

大都市に集った人々は、村や小さな町で暮らしていた頃のような昔からの顔見知りではない。隣人の生活は秘密のベールに包まれ、近所で事件や事故が起こるたびに不安でいっぱいになる。そんな都市で生活しながら精神衛生を保つために、人々はその地域での共通の話題や情報を求めるようになった。技術改良によって大量印刷が可能になった印刷会社はそうした人々の需要を見抜き、大量の新聞や雑誌を発行、鉄道によって各地に輸送して売りさばくようになった。多くの人の手に渡った新聞や雑誌は、流行を作り出したり娯楽を提供したりしながら、都市の人々に大きな影響を与える存在になっていった。

このように、19 世紀は都市の発展に伴って新聞や雑誌の需要が急増し、出版産業が発達した時代だった。自分が住んでいながらよく知らなかった都市の情報と、日々の楽しみになる架空のお話（小説）が載った読み物が低価格で手に入るとなれば、人々はこぞってそれを買い求めるようになる。こうして、ほとんどの階層の市民は日々の日課として新聞や雑誌を読み、自分たちの住む都市の情報を消費するようになった。

しかし、「自分たちの住む都市の情報」といっても、そこで語られるのは自分とは直接かかわりのない人物や出来事がほとんどのはずだ。それにもかかわらず、新聞・雑誌の消費者は「ここに書かれていることは自分が知っていなければいけないことだ」と思って熱心に記事を読み、流行を追った。こうした、「自分が直接知っている人々ではないが、その人々の輪の中には自分も含まれている」という感覚は、新聞や雑誌といったマスメディアと小説の登場以前には人々の心になかった[5]ものだ。

1.2 マスメディアの黎明期には現代と似た混乱があった

前述のように、19 世紀には新聞や雑誌といった都市に暮らす人々に向けた情報が大量に生産・消費されるようになった。それまでは村や町といったお互いに顔を知っているもの同士が集まった小さな共同体の中での情報交換が当たり前だったので、この変化は大きなものであったに違いない。この時代に現在も人々の生活に大きな影響を与える市民のための情報媒体、「マスメディア」が誕生した。

マスメディアの黎明期には、たくさんの小規模な新聞社・雑誌社が生まれ、それぞれが競

---

[5] ベネディクト・アンダーソンはこれを『想像の共同体』(1983 年)の中で主張し、20 世紀に二つの世界大戦の遠因となったナショナリズムの起源を新聞・雑誌・小説に見出した。(p.25)

合して人々の関心を惹くために記事を書いた。そこでは情報の「確かさ」や「質」よりも、「新しさ」や「面白さ」が求められた。この時代の言説の混乱の度合いは、現代の「ポスト・トゥルース」と呼ばれる情報の混乱とよく似ている。

では、具体的にどのようなところが現代と似ているのか、マスメディアの黎明期である 19 世紀の新聞・雑誌の状況を見ていきたい。

1.3「ナウさ」を志向する新しい言説

山田登世子著『メディア都市パリ』（1991 年）の中にこんな一節がある。

> モード産業のかたわらで、情報が商品になる。いずれもその売りものは鮮度であり、ナウさ（ニュース！）である。いっぽうが目の快楽の装置なら、もういっぽうは知の快楽の装置である。日々新しい出来事を「知る」という楽しみ。この知の快楽を大々的に産業化したのがジャーナリズムであり、ジャーナリズムこそインダストリーの世紀十九世紀が生んだ最大の産業の一つにほかならない。[6]

情報は鮮度が命。新しい情報こそが「ニュース」で、古い情報には価値がない。それは現代とまったく変わらない情報のあり方だ。流行は日毎、週毎に変化する。流行に後れると「ダサい」と後ろ指を差されてしまう。「ナウい」という言葉が時代遅れになろうがなるまいが、「ナウさ」は常に更新されていく。「ナウい」という言葉が古くなって使う人がいなくなっても、「ナウさ」を志向するジャーナリズムの本質は変わることがない。

ここからは、この『メディア都市パリ』を参考にして、19 世紀のパリのジャーナリズム（新聞・雑誌）の有様を考察したい。

19 世紀は産業が発展し、都市に人口が集中した。急成長する街。雑多な往来。すぐ隣に住んでいる人の素性も知れないという不安感。そんな人々の不安を糧に、情報産業は急成長した。

人々はなぜ流行（モード）とゴシップを好むのか。その理由は、新聞や雑誌が、都市で暮らす人の「普通」と、都市が隠そうとする「真相」を教えてくれるからだ。「みんなと違っていたくない」とか、「みんなが知っているあの事件（人）の真相（裏の顔）が知りたい」という、都市化に伴って膨れ上がった欲求を満たすために、人々は流行品店に通い、新聞を読んだ。このようにして情報を求める姿は、現代の私たちと重なるところがある。

前述のように、ジャーナリズムという「ナウさ」を志向するあたらしい言説には、情報の「鮮度」が何より重要だった。そのため出版社は記者を雇い、各地に派遣して最新の情報を仕入れなければならなかった。しかし、記者をたくさん雇って面白い記事を書かせるにはコストがかかる。さらに、せっかく面白い記事が出来上がっても、他の新聞に先を越されてしまったら記事の価値はなくなってしまう。これは現代の新聞・週刊誌にも通じるジャーナリ

---

[6] 山田『メディア都市パリ』p.15

ズムのジレンマだ。

そんな中、二つのアイディアでそれまでの出版流通のルール（記者の取材でわかった事実にもとづいて記事を作る）を変えてしまう男が現れる。「新聞王」エミール・ド・ジラルダン(Emile de Girardin)だ。

1.4「ハサミとノリ」でコラージュされた言説

ジラルダンの二つのアイディアとは、「広告収入」と「剽窃」だった。

ジラルダンは 1836 年に、最近の流行や注目を集めた出来事・ゴシップを扱う『プレス』紙を創刊した。『プレス』紙の年間購読料は 40 フランくらいで、それまでの新聞の半分ほどの値段だった。そのため多くの庶民に読まれ人気を得た。他の新聞の年間購読料を払えず図書館や貸本屋、カフェで新聞を読んでいた低所得の読者も、この値段なら買って読むことができた[7]。

しかし、新聞の値段を下げてしまうと、当然一部あたりの利率も下がってしまう。そうするとその分どこかで収入を得なければ破産してしまう。そこでジラルダンは「広告収入」というアイディアを思いついた。彼は『プレス』紙の第四面をすべて他の企業の宣伝にあて、企業から広告料を得たのだ[8]。21 世紀ネットメディアでは、個人のブログなどに広告が挿入され、誰かがそのリンクをクリックして購買につながった場合に広告主からマージンが支払われる「アフィリエイト」という仕組みがあるが、これは 19 世紀に発明された広告収入というシステムが個人に解放された姿だといっていいかもしれない。

ジラルダンはさらに、面白い記事を低コストで生み出す方法を思いついた。他紙の「剽窃」だ。彼は良質な記事を作るために記者に払う取材費をケチり、他紙の面白そうな記事を「ハサミとノリ」で切り抜いて貼り付け、より抜き記事を作った。それぞれの新聞社がお金をかけて取ってきた渾身のネタをかき集めて記事にするわけだから、面白くないはずがない。人々はだんだん『プレス』だけ読んでいればいいという気になってきて、まじめに取材した新聞は売れなくなっていった。ジラルダンが『プレス』紙創刊以前に発行した初めての小新聞のタイトルはなんと『盗人』。ジラルダンが確信犯であったことがわかるだろう。これも今でいえば、まとめサイトなどのネットニュースの登場で、人々が新聞を読まなくなりつつあるのと同じ現象だ。

多くの人がひとつの新聞を読むようになれば、そこに流行が生まれる。パリに流行（モード）を生み出したのは、圧倒的な安さと流通量だった。

それまでの常識が覆され、ルールが組みかえられていく過程では必ず混乱が生じる。『プレス』紙の登場によってそれ以前の「まじめ」な新聞は力を失い、『プレス』紙を真似た多くの

---

[7] 山田 pp.58-59

[8] 当時は印紙税の関係もあって新聞の値段は高かった。そのため多くの人は年間購読料を払えず図書館や貸本屋、カフェなどで新聞を回し読みした。商人ジラルダンは彼らに新聞を買わせるために新聞の価格を下げる方法を考えた。それが「ジャーナリズム史上名高いジラルダンの広告戦略」（山田 p.58）である。

新聞が流布するようになった。次第にそれは剽窃合戦になり、より過激で、人々の興味をそそる記事を奪い合うようになった。その中には、真偽の定かでない「いかがわしい」記事もたくさんあったに違いない。

1.5「truth」（真実）と「fact」（事実）

上で述べた、「まじめ」な新聞に対する「いかがわしい」新聞の構図をもっと掘り下げて考えてみたい。

「まじめ」な新聞はきちんとした取材を行い、そこから得られた事実を人々に伝えようとする。正しいことを伝えなければいけないわけだから、取材にも記事を書くのにもお金と時間がかかる。非効率的ではあるが、誠実で筋の通った新聞という感じがする。それに対して、「いかがわしい」新聞は大した取材をせずに早さと面白さ優先で記事を書く。確かにそれならお金も時間もかからない。しかしどこか胡散臭い。

こうした新聞社の方針の対立は、それぞれの立脚する価値観の違いによって生じている。価値観とは、「何を正しいと考えるか」ということだ。「まじめ」な新聞は、道徳的にも倫理的にも正しい、まっとうな正義感をもっている。どの時代であってもある程度普遍的な立場だろう。対して「いかがわしい」新聞が奉じるのは、合理化と効率優先の「資本主義」という名の正義、産業革命が生み出した新しい正義だ。つまり、「まじめ」な新聞に対する「いかがわしい」新聞の台頭とそれに伴う言説の混乱は、産業革命による人々の価値観の変化を如実に表した現象なのだ。

みんなが同じ価値観をもっていれば、混乱や猜疑心は生じない。大きな変化のときに人々が混乱したり不安になったりするのは、ひとつの集団に異なる価値観の人々が同居する状態が発生するからだ。古い価値観といくつかの新しい価値観が入り乱れて、隣人や家族の気持ちを汲むのが難しくなる。それは現代とも通じる問題かもしれない。

古い共同体が失われ、大きな都市の中で出自の違う人々が一緒に暮らすということは、それまで共同体で信じられてきた迷信や信仰が力を失うということでもある。ジャーナリズムの発達は、中世を支配したキリスト教の衰退と裏表の関係になっている。

ところで、最近話題となっている「ポスト・トゥルース」という言葉、直訳すると「真実以降」「脱真実」といった意味になるが、この言葉が定着する以前には同じような意味で「ポスト・ファクト」という呼称も見聞きした。日本の新聞等ではほとんど同じ意味の言葉として使用されているようだったが、欧米人にとっては「truth」と「fact」の違いは私たちが考えている以上に大きい。

「truth」は、「（絶対的な）真実」のことを指す。キリスト教圏においそれは神の領域の概念だ。それに対して「fact」はラテン語の「facere」（作る）が語源で、「（人間によって）作られたもの」というニュアンスをもっている。この「facere」と同じ「作る」という意味をもつラテン語に「fingere」という語があるが、こちらは「作り話」「小説」という意味の「fiction」

の語源となった[9]。つまり「fact」（事実）は「fiction」（作り話・小説）と同様に「作られたもの」という語源をもつ言葉で、現実の対象を人間が共有可能な状態に置換したものだということができる。簡単に言えば、聖書が示す絶対的に正しいことが「truth」で、新聞や雑誌などのニュース記事は「fact」、そうした媒体に掲載された架空のお話は「fiction」ということだ。

近代に入ってキリスト教が示す「真実」の絶対性が揺らぎ、さらに王侯貴族の地位が相対的に下がることによって「誰もがいいと認めるもの＝古典」の価値も低下していった。何よりも新しいものが良いという時代が到来しつつあったのが 19 世紀だった。その情報が目新しくて面白ければ、真偽の判断は二の次にして真っ先に飛びつく。「トゥルース（真実）」を、キリスト教的な「絶対的に正しいこと」という意味でとらえるならば、19 世紀はすでに「ポスト・トゥルース」の時代であったかもしれない。

キリスト教的な真実が重要視されなくなったのが「脱真実」の 19 世紀だとすれば、21 世紀は事実かどうかより面白いかどうかが重要視されるようになった「脱事実＝ポスト・ファクト」の時代であるともいえるだろう。「ポスト・トゥルース」という呼称が定着したのは、キリスト教圏の人々にとって、「truth」の重要性を問いかける言葉としてよりショッキングであったためかもしれないが、客観的な事実であるはずの「fact」さえも信用できず、事実であることの重要性そのものが揺らいでいる現状を考えると、「ポスト・ファクト」の方が正確な呼称かもしれない。

1.6「ポスト・トゥルース時代」のネットメディア

19 世紀がマスメディアの黎明期だとすれば、20 世紀はマスメディアの成熟期だった。20 世紀にマスメディアは国家にも引けをとらない影響力を獲得した。第二次世界大戦に勝利してあれだけ威信を高めたアメリカがベトナム戦争に勝てなかったのは、戦場の映像がテレビによってアメリカ国民に知られ、支持を得られなかったからだとも言われている。テレビ・ラジオは、映像と音声で普段活字を読まない人にもわかりやすくニュースを伝えることができる。今でも、新聞は取ってないがテレビのニュース番組はよく見るという人は多い。日本の東京キー局を見ればわかるように、テレビ番組を作っているのも新聞社やその派生企業だ。マスメディアの巨大化、伝え方の多様化と成熟が、20 世紀のトレンドであったといえるだろう。

それに対して、21 世紀に入って急速に存在感を増しているメディアがある。SNS やまとめサイトといったネットメディアだ。SNS では、利用者の投稿に混じって見出しと簡単な説明のついた小さい記事がいくつか表示され、リンクをクリックするとニュース製作元のウェブページにアクセスして詳細を確認することができる。まとめサイトも興味をそそる見出しを

---

[9] 「truth」「fact」「fiction」の語源と関係性については、平成 28 年度後期の中谷崇担当の講義”Literary Criticism 1”の内容を参考にした。また、「truth」「fact」「fiction」の関係を述べた他の文献として、ロバート・スコールズ(Robert Scholes)の著書 *The Element of Fiction* の冒頭第一節「FICTION, FACT, AND TRUTH」(pp.3-4)の記述も参考にした。

つけてアクセスを誘う仕掛けになっている。こうしたニュースは基本的に無料で読むことができる。ウェブページ内に広告が挿入され、ニュース製作元とメディアの運営側は広告主からアフィリエイトを得ることができるからだ。アフィリエイトで収入を得るのは企業だけでなく個人でも可能なので、ブログ等を利用して収入を得ている人も多い。

このようなネットメディアが既存のマスメディアと特に違っているのは、個人が情報の消費者であると同時に提供者にも拡散者にもなれるというとことだ。そのためネットメディアでは、公式なニュースと私的な意見の境が曖昧になる傾向がある。一人一台スマートフォンを所持する時代、こうした傾向はさらに強まっていくことになるだろう。

序論でも述べたが、こうした状況では個人が判断力を失い、多数派の意見に飲まれてしまう危険性がある。「ポスト・トゥルース」や「フェイクニュース」といった言葉は、そうした状況に対する危機感や不安を言い表したものだろう。

1.7「いかがわしさ」の時代をマガジニストとして生きた作家ポー

新聞や雑誌によって「いかがわしい言説」が流布された 19 世紀を、作家兼雑誌編集者として生きたポーの作品を読み解くことは、ネットメディアが発達して真偽の定かでない情報が溢れる「ポスト・トゥルース」の現代を考える上でも役に立つはずだ。

自らを「マガジニスト」[10]と呼んだポーは、雑誌と小説の関係、ひいては都市とそこで語られる言説の関係に常々意識的な作家だった。たとえば「群衆の人」という作品でポーは、ロンドンの街を歩き回る不思議な老人を追いかける中で、大都市ロンドンの雑多な往来、真夜中でも活気に満ちた酒屋、浮浪者がたむろする貧民街の様子を生き生きと描写してみせた。国をまたいでの旅行がまだ一般的ではなかった当時、「群衆の人」を読んだアメリカの読者は、この作品を一種の旅行記、もしくは大都市のルポルタージュとして受容したに違いない。都市化によって人々の関心が移り変われば、必要とされる小説もまた変わる。ポーが残した作品の多くは、都市に住む人々と、それに憧れる人々の関心をよく捉えていた。

しかし、海外旅行が普通になり、グーグルアースで世界中を見て回れる現代に生きる私たちが「群衆の人」を読んでも、不思議な魅力のある面白い作品だと感じることはあっても、これまでになかった画期的な作品だとは思わないだろう。本稿では、現代の私たちが知らず知らずにかけている「21 世紀的常識」という色眼鏡をはずして、鋭敏な「観察者の目」をもったポーの作品のいくつかを「ポスト・トゥルース時代」を問い直す画期的な作品として読み直してみたい。

それでは、まずは「群衆の人」を 19 世紀にはじめて読んだ読者の気分になって[11]、作中の追跡者が見た大都市ロンドンの姿を想像してみよう。

---

[10] 野口啓子、山口ヨシ子『ポーと雑誌文学　マガジニストのアメリカ』p.18

[11] 現実の出来事やテキストといった事実（ファクト）を、観察者の目をもって捉えなおそうという本稿の趣旨と矛盾しているように思われるかもしれないが、現代の価値観に染まった「私たち」が思い込みから抜け出す第一段階として、19 世紀のアメリカの読者の気持ちになってテキストを読むことは重要だと考える。つまり、現代を「他者化」するプロセスの第一段階として「同一化」を試みる。

第二章　「群衆の人」を追え

「群衆の人」(“The Man of the Crowd”)は、1840 年に『グレアムズ・マガジン』創刊号に掲載された短編小説だ。ここからは、「群衆の人」を当時のアメリカの読者がどのように受容したかを考慮しながら読み直していきたい。

なお、本章では『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱ ミステリ編』(巽孝之訳, 2008 年)収録の「群衆の人」をテキストに使用する。

2.1 あるのは地図と想像力

さて、この作品を当時のアメリカの読者はどのような気持ちで読んだのか。後の時代になって「探偵小説のレントゲン写真」[12]といった評価を得ることになる本作だが、同時代の読者にとってはそんなことは関係ない。単純に、雑誌に掲載された一小説として出会っているはずだ。

本作を読んで印象に残るのは、雑多な往来の無秩序を反映した、魅惑的でありながら不気味な夜の都市の姿だ。現代の日本人なら、人通りの絶えない夜の街から連想して渋谷や新宿を思い浮かべるかもしれないが、夜中も明かりが煌々と照っていて人通りの絶えない街路など見たこともない当時のアメリカの読者は、この作品をどのようにして楽しんだのだろうか。

ロンドンに行ったことはなくても、彼らだって町の本屋や貸本屋を探せばロンドンの地図くらいは手に入れることができただろう。地図を見て、本作で老人がたどった経路を想像しながら、「ロンドンにはなんてたくさんの建物や通りがあるのだろう」と、はるか遠い大都市ロンドンの姿に想いを馳せていたかもしれない。

実は、当時の人が見たであろうロンドンの地図（古地図）は現在、インターネットにアク

---

[12] 巽孝之は、ポーの作品の中でもミステリー色の強いものを集めて収録した『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』の解説の中で、「群衆の人」を収録した理由を以下のように述べている。

> ミステリ編を謳(うた)う本短編集に、今日ではカフカや阿部公房を思わせる不条理風、実存主義風の小説が入っているのを、いささか奇異に思う読者もおられるかもしれない。
> 収録の理由は、このところ二十世紀前半に活躍したドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンの再評価とともに、彼が「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」(一九三八年）で「群衆の人」を「探偵小説の衣装、つまり犯罪」だけが欠落して「骨組、つまり追跡者、群衆、そして一人の未知の男」だけが映し出された「探偵小説のレントゲン写真」にたとえた再解釈が脚光を浴び、まったく新たなポー像が描かれるようになったためである。(巽 pp.269-270)

「群衆の人」が、「探偵小説のレントゲン写真」でありながら、「カフカや阿部公房を思わせる」のはなぜか。ロマン主義の時代であった 19 世紀に、リアリズム的な探偵小説を書くことになるポーは、その前段階でポスト・モダンを描いてしまったということだろうか。時代的にリアリズム小説の技法が未成熟だったために、かえって反リアリズム的な作品となったのかもしれない。ポール・オースターをはじめ、ポスト・モダン作家の中でポーの評価が高いのはそのためだろう。

セスできるすべての人に対して公開されている。googleearth.pro をダウンロードして、レイヤーの項目から「古地図」を選択すれば、球形の世界地図上の、ロンドンのちょうど同じ位置に、1843 年のロンドンの古地図を貼り付けることができる。

本章では、この古地図を参考にして、老人と語り手がどの経路をたどったのか検証・推測し、彼らを追跡する。

まず「群衆の人」のあらすじを示す。

ある秋のこと、病による倦怠から持ち直した語り手は、ロンドンは「D」で始まる名を持つホテルのコーヒーハウスの窓際に座り、幸せな気分で曇りガラス越しの往来を眺めていた。目の前の街路はロンドンの主要な往来だったので、夜の帳がおりるころには群衆は一気にふくれあがった。往来を埋め尽くすようにして歩くのは、きちんとしたスーツに身を包んだ「勤め人」(p.122)、紳士と見間違えそうなほど立派な身なりをして往来に溶け込む「掏摸」(p.123)や「賭博師」(p.123)などのアウトローたち、そして「乞食」(p.124)や「酔っ払い」(p.125)などの貧しい人々。絶えることのない無秩序な人並みを眺めながら、語り手は通行人たちの身なりやしぐさからかれらの職業や階層を想像して楽しんだ。

ふと、ひとつの顔が目にとまる。それは六十五歳から七十歳ほどになろうかという老人の顔だったが、そこにはこれまで見たことのない独特な表情が浮かんでいた。語り手は老人に惹き付けられ、ついに彼を追いかけるために往来へと飛び出した。

「短躯痩身(たんくそうしん)、そのうえひどく衰弱している」(p.128)ように見える老人は、汚らしいボロ着をまとってはいるが、時折見える肌着そのものはきれいな生地でできているようだ。奇妙な身なりだが、さらに目に映ったのは、外套の裂け目ごしからちらりと覗くダイヤモンドと短剣。ますます好奇心を掻き立てられた語り手は、この謎の男をどこまでも追いかけて行こうと心に決めた。

老人はロンドンの町を往来から往来へと歩き回った。人通りの多い街路ではゆっくりと歩き、人気のない通りは走ったりしながら、老人は何時間も歩き続けた。きらびやかな商店街や酔っ払いのたむろする路地裏、陰惨な貧民街を抜けて、語り手は老人を追った。

やがて夜が明ける。それでも老人は歩みを止めない。二日目の夜の帳が降りるころ、とうとう語り手は老人の真正面で立ち止まり、その顔をまじまじと見据えた。しかし、それでも老人は語り手に気がつかない。それを見て語り手は次のように結論付け、長い追跡劇は幕を閉じる。

「この老人は」[...]「深い罪の典型であり本質なのだ。彼はひとりきりでいることを好む。彼は群衆の人なのだ。追いかけても無駄なこと、なぜなら彼自身からもその行動からも、何一つ学ぶべきものはないのだから。」(p.135-136)

このように、「群衆の人」の中には、「謎」と「追跡」という、推理小説には欠かせない要素が入っている。しかし、その謎を「推理」し、事件を「解決」するという手順がないために、この小説は探偵小説・推理小説たりえない。そういった意味で、「群衆の人」は「探偵小説の

原型（プロトタイプ）」だ。この一年後の 1841 年に、ポーは世界初の「本格的」[13]推理小説「モルグ街の殺人」を生み出すことになる。とすると、ポーが「群衆の人」を書く中で推理小説の誕生につながる重要な発見をしたことは間違いないだろう。

2.2 追跡　「群衆の人」

テキストを注意深く読み直して「老人」と語り手の足跡を追う前に、前述のロンドンの地図(図 1)を見ておこう。

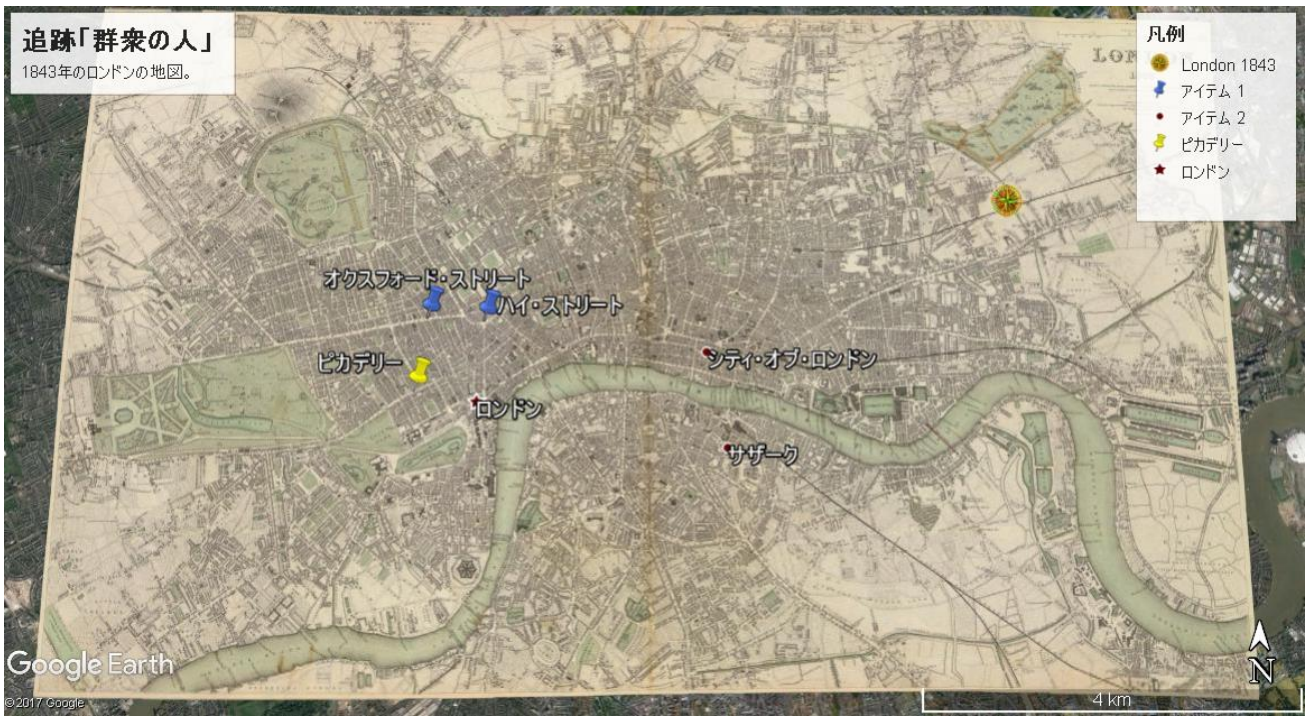

図 1(googleearth.pro;閲覧日 2017 年 12 月 20 日;オクスフォード・ストリート、ハイ・ストリート、ピカデリーの表記は引用者)

ロンドンの中心地だけを拡大すると次頁(図 2)のようになる。

[13] 野田啓子、山口ヨシ子『ポーと雑誌文学―マガジニストのアメリカ』p.35

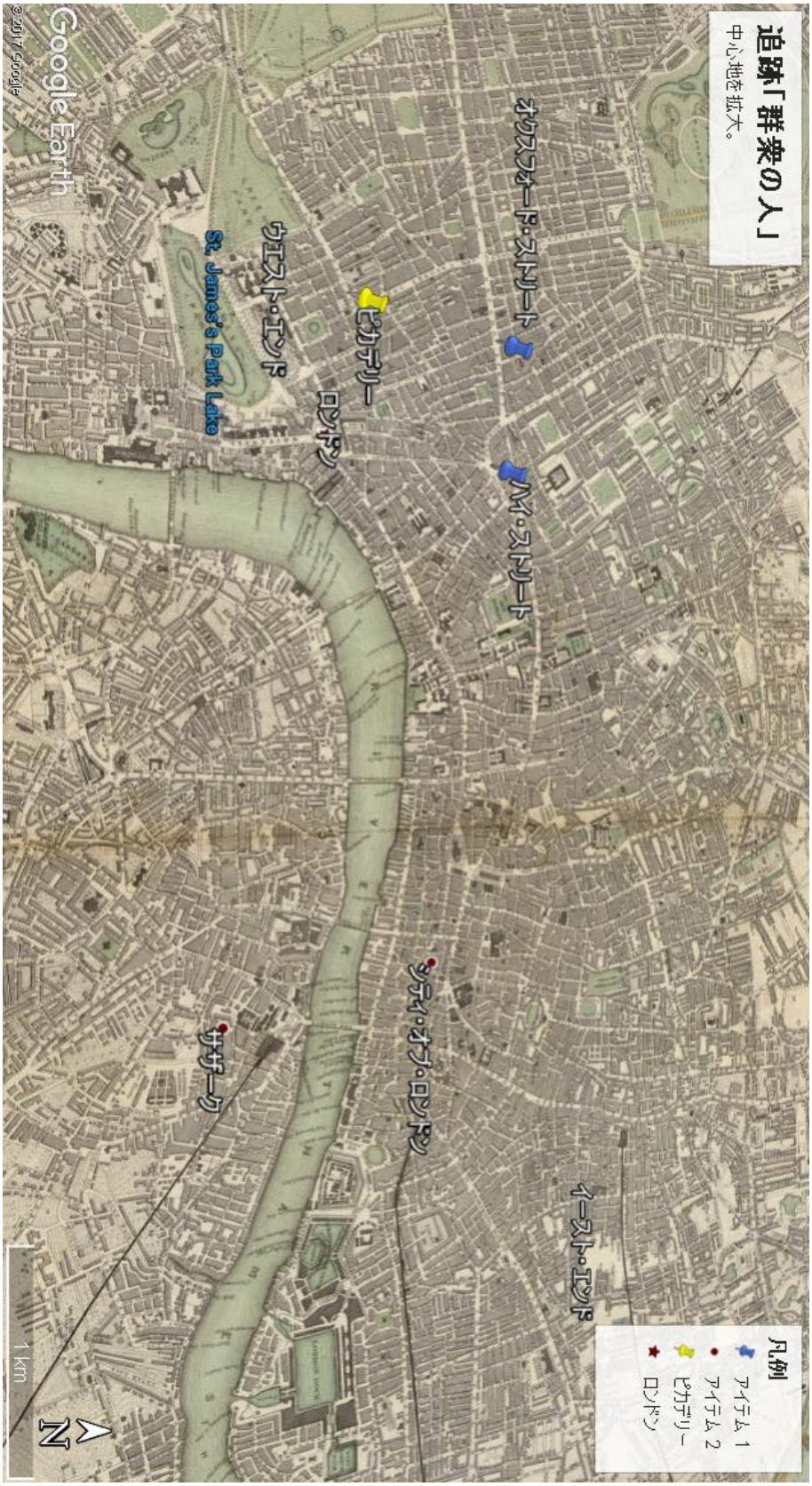

図 2（Googleearth.pro;閲覧日 2017 年 12 月 23 日;オックスフォード・ストリート、ハイ・ストリート、ピカデリー、ウエスト・エンド、イースト・エンドの表記は引用者）

それでは、テキストの中で老人と語り手のたどった経路を特定・推測するのに必要と思われる箇所を抜き出してゆこう。

起点となるのは、語り手が往来を眺めていた「「D」で始まる名を持つホテルのコーヒーハウス」(p.119)だ。「目の前の街路はロンドンの主要な往来であり、一日中ずっと混み合っている。」(p.120)という記述から、筆者はこのコーヒーハウスがオックスフォード・ストリートかハイ・ストリートのいずれかの通りに面していると仮定した。地図上には青色のピンでおおよその位置を示した。

語り手が往来を眺めているうちに、日は暮れだし、「当初こそ夕暮れとのせめぎ合いでいかにも弱々しく見えたガス灯がついに幅を利かせるようになり、街のすべてを奇妙で絢爛たる光のうちに輝かせる」(p.120)ようになった。作中で言及されていないので本作の季節はわからないが、老人が外套をまとっていることを考えると秋、冬、早春のいずれかだ。そうなると、このときの時刻は大体 18 時から 19 時あたりになるだろうか。

そして語り手は老人に目をとめ、往来へ飛び出した。ここから語り手の長い追跡劇が始まる。

「老人は巨大な街路をほうほうのていで突き進んだ。」(p.129)

「彼はだんだん横町に入って行く。」(p.129)

「男は通りを横切ったかと思うとまた元に戻るといった動きを、ただ無目的にくりかえすばかり。」(p.130)「彼はそこをほぼ一時間ほどもさまよったろうか。」(p.130)「つぎの角を曲がると、煌々と明るく躍動感に満ちた広場に出た。」(p.130)

この「煌々と明るく躍動感に満ちた広場」をロンドンのウエスト・エンドにある広場ピカデリー・サーカスだと考えると、起点（と思われる大通り）からの距離と移動に費やした時間を考えても矛盾はない。ピカデリー・サーカスの位置は地図上に黄色のピンで示した。

「しかし彼が広場を一周するやいなや、わたしが一驚したのは、なんと彼がくるりと踵を返し、自分の歩みを逆行してみせたことだ。さらに驚愕したことには、彼は何とそうした歩き方を何度かくりかえしたのだった。」(p.130)

老人はこうした歩き方を「さらに一時間ほど」(p.131)くりかえす。追跡開始から二時間以上が経過し、時刻は 20 時から 21 時を過ぎた頃だろう。この時間帯になると、街の中でも活気のある場所と人通りの少ない寂れた裏通りで差が出てくるらしい。

「いくぶん寂れた横町へと入り込む。そして彼はその通りを四分の一マイル(約四百メートル)ほど、老人とは思われない動きで失踪し、[...]数分ほど追いかけていくと、巨大な喧騒で満ちた商店街に出た。」(p.131)

「一時間半かそれくらい」(p.131)のあいだ、老人はこの商店街をうろついた。すると、「大時計が十一時を知らせるべく鳴り響」(p.132)く。これまでの追跡で経過した時間と照らし合わせても矛盾はない。

「彼はたちまち通りへ入ると、[...]やがて信じられないほどの素早さで、紆余曲折し人っ子一人見えない通りをつぎからつぎへと通り抜け、ついにはこの追跡行の起点である大通りへと——そう、あの最初が「D」で始まる名を持つホテルに面した大通りへと——立ち戻るに至

ったのである。」(p.132)

老人は起点である大通りに戻ってきて、やっと一巡した。しかし追跡劇はまだ続く。

「こんどは川の方向へ向かい、いくつもの曲がりくねった道を通り抜けると、ついに主要な劇場街に出た。」(p.132)

この「劇場街」とは、テムズ川沿いの、トラファルガー広場に程近い劇場街のことだろう。地図上で見ても、起点から川へ向かう線上に位置しており、矛盾はない。

「男が進むにつれて群衆はますますまばらになり、狭くて暗く寂れた横町に入り込んでいた。」(p.133)「やがて、何かに取りつかれたかのように、彼はロンドンのはずれへ向かう道を急ぐ。」(p.133)

ロンドンのはずれに、この老人の目的地があるのだろうか。もしかしたら家に帰るのかもしれないな。そんな展開を予想しながら、当時の読者はページを捲ったことだろう。

「そこは、これまで散策してきたのとまったく色合いの異なる地域に位置しており、そこでは何もかもが貧困のきわみと悪事のきわみを象徴する最悪の烙印を捺されていた。たまたまそこに灯っていたランプのおぼろげな光から浮かび上がってきたのは、背が高く古風ながら虫食いだらけの木造家屋の一群がいずれも倒壊しかけており、(...)おぞましき汚物が塞ぎ止められたどぶどろの中で腐り果てている。」(pp.133-134)

やってきたのはなんと貧民街だった。ロンドンの貧民街といえばイースト・エンドと呼ばれる地域で、その名の通りロンドンの中心地から東へ行ったところにある。地図上でいえばシティ・オブ・ロンドンのさらに東側、密集した建物が徐々にまばらになってくるあたりだ。このあたりに老人の住まいがあるのだろうか。

「だが、われわれが歩みを続けるうちに、人間生活の響きが着実に甦り、ついにはロンドンの民衆のうちでも最下層の連中からなる巨大な楽団が楽しげに千鳥足でやってくるのにでくわした。」(p.134)

「すると、いきなり角を曲がったところでまぶしいほどの光が爆発したかと思うと、我々は酒乱の象徴たる巨大な郊外の神殿のひとつ、すなわちジンという名の悪魔の宮殿のひとつと対面したのであった。」(p.134)まばゆい光を放つ飲み屋。この店は真夜中であっても盛況らしい。アルコール度数が高く価格の安いジンは、いつだって労働者の心のよりどころだ。

さて、そんな飲み屋でも「そろそろ店長が閉店を告げる時間になったらしい」(p.134)。

老人もそろそろ家に帰るかと思いきや、放浪はまだまだ終わらない。

「彼は自分の務めを放棄するどころか、それこそ気でも違ったかと思われるほどの力をふりしぼり、すぐに元来た道を折り返し、この大いなるロンドンの中核へと戻って行く。」(pp.134-135)

「やがて歩き続けるうちに日が昇り、そしてわれわれがふたたびこの人口過密な都市のうちでも一番群衆のひしめく中心地、すなわち「D」で始まる名を持つホテル前の街路に立ち戻ったとき、そこには昨夜にも劣らぬ人間たちの喧噪と活気をすっかり取り戻していた。」(p.135)

「彼はいつものように行ったり来たりをくりかえし、その日のうちには騒然たる街路から

移動しようとしない。そして、第二日目の夜の帳が降りるころ、わたしはほとほとくたびれ果て、この遊歩者の真正面で立ち止まり、その顔をまじまじと見据えたのだ。」(p.135)

こうして、まる一日以上老人の追跡を続けた語り手は、ついに「語り始める」。

> 「この老人は」と、ついにわたしは語り始める――「深い罪の典型であり本質なのだ。彼はひとりきりでいることを拒む。彼は群衆の人なのだ。追いかけても無駄なこと、なぜなら彼自身からもその行動からも、何一つ学ぶべきものはないのだから。世の中で最悪の心というのは、『魂の小楽園』なる祈祷書以上に俗悪なる書物なのであり、『読まれることを拒む本』が存在するというのは、おそらく神の深遠なる恵みのひとつにほかなるまい。」(pp.135-136)

2.3 推理　大都市ロンドンを観察する遊歩者

語り手が「群衆の人」だと結論づけた老人とは、いったい何者なのだろうか。もちろん、語り手のいうままに受け取って、この作品は一種の不条理を描いた小説なのだと思って楽しんでもかまわないだろう。しかし、19 世紀は科学の時代だ。ここでは、当時の科学主義・合理主義に懸命な読者の気持ちになって、今一度「群衆の人」とは誰なのかを考えてみたい。

老人はロンドンのありとあらゆる通りを巡る。それは地図上で見てきたことから明らかだ。大都市の表の顔としての繁華街や裏の顔としての貧民街。もしかすると、老人はロンドンに旅行か何かで訪れただけなのかもしれない。そう考えると、老人がいつまでも飽きもせずに通りを巡り、さまざまな場所を眺めて回っていたことにも説明がつく。夜でも店の灯りや街灯が通りを明るく彩り、人通りの絶えないロンドンは、初めて訪れた者にとって興味の尽きない魅惑的な街だった違いない。まる一日歩き通しというのは少しはしゃぎすぎている気もするが、老人が観光で訪れていたというのはありえそうなことだ。

しかし、普通の旅行客は貧民街には行かない。そこで考えられるもうひとつの仮説が、老人は記者か作家であり、取材のためにロンドンを巡っていたのではないか、というものだ。

老人はジャーナリストで、浮浪者に変装して大都市ロンドンの実状を調査していた。もしこの仮説が正しければ、語り手が老人をどのカテゴリーにも分類できなかったことにも合点がいく。つまり、老人は語り手と同じ「観察者」だったのだ。

2.4 個人の秘密を読もうとする語り手

ここまでは語り手の視点になって、老人を追跡し、その行動を分析してきたが、ここからはその語り手とはいかなる存在なのかを考察したい。

語り手は、ロンドンの主要な大通りに面したコーヒーハウスで往来を眺めて過ごしている。建物の中からガラス越しに人々を見る一方的な視線は、当然ながら高層建築もガラスもない産業革命以前の都市にはありえなかった[14]。語り手はガラス越しに往来を俯瞰できたので、

---

[14] この一方的な視線を可能にしたのは、透明で均一な厚さのガラスでできた窓だ。ガラスでできた透明な窓の起源はローマ時代にまでさかのぼるが、窓を介して「見るもの」と「見られるも

人々をいくつかのカテゴリーに分けて描写することができた。

「貴族」(p.122)「商人」(p.122)「勤め人」(p122)、「掏摸」(p.123)、「賭博師」(p.123)、「酔っ払い」(p.125)といったカテゴリー分けは、都市の集団を大掴みに捉えて分析するには有効な手段だ。しかし、そうして人々を分類しているところに、どのカテゴリーにも属さない、奇妙な身なりの老人が現れる。語り手が老人に興味を惹かれたのは、老人を分類し分析することができなかったからだ。語り手は老人に謎や秘密の存在を感じ、追跡を決意した。

語り手が尾行をする動機は、老人の素性を明らかにすることだ。個人の秘密を探り、その本性を暴くという言う意味では、語り手と、スキャンダルやスクープを狙うゴシップ誌の記者の行動原理は同じだ。語り手はジャーナリスト的な「観察者」だといっていいだろう。

語り手も「老人」も同じ「観察者」だった。つまり、語り手は自分の分身のような存在を追いかけていたのだ。語り手が作家としてのポーの投影で、「老人」がジャーナリストとしてのポーの分身だったと仮定すると、ここに以下の仮説を導き出すことができる。

「群衆の人」は、作家ポーがジャーナリストとしてのポー自身を捉えた作品だった。

自分のことは案外自分ではわからないものだ。ポーはこの作品の中で自身のもつ「観察者」という性質を語り手と老人に一旦他者化し、自分を客観的に捉えなおすことができたのだろう。彼は自分が集団の「観察者」であることに気がつき、その視点を物語に取り込んだ「群衆の人」を書きあげたことで、翌年に世界初の推理小説「モルグ街の殺人」を生み出すことができたのだ。

2.5 老人とオーギュスト・デュパン　「群衆の人」から「モルグ街の殺人」へ

「群衆の人」が『グレアムズ・マガジン』に掲載された一年後の 1841 年、『バートンズ・ジェントルマンズ・マガジン』と『グレアムズ・マガジン』の合併号に、「モルグ街の殺人」が掲載された。同誌の編集長にも就任したポーは、販売部数を５千部から一挙に３万７千部に躍進させた[15]。同誌が売れたのはやはり「モルグ街の殺人」の評判によるところが大きいだろう。世界初の推理小説「モルグ街の殺人」には、今日の推理小説ではおなじみの存在となった「探偵」が登場する。名前をオーギュスト・デュパンという。

の」が隔てられたのは、資本主義以後のことだ。ジャン・パリス(Jean Paris)は、『空間と視線』の中で以下のように述べている。

> 神であれ、人間であれ、動物であれ、支配権力が視力に由来することは確かである。そして直ちに生きとし生けるものは二つの階級に分けられる。その権力を行使するものと行使されるものである。[...]視覚は権力の原理の基礎をなす。見ること、それはすでに征服することであり、対象物の魔術的所有権を確立することにほかならない。（パリス『空間と視線――西欧絵画史の原理』pp.48-49）

この指摘が資本家と労働者の関係を暗に示していることは明らかだ。本稿でいう「観察者」は、ある種の特権的な立場にいる者ではあっても、支配者や対象の所有者とまでは考えていないため、これ以上この議論には立ち入らないが、「見るもの」と「見られるもの」の関係が産業革命以降の社会で明確になったと指摘するのは重要なことだ。

[15] 巽「年譜」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』pp.277-278

デュパンは「モルグ街の殺人」以外にも、「マリー・ロジェの謎」(1842-1843 年)と「盗まれた手紙」（1844 年）に登場する。それだけ人気があった登場人物だったのだろう。科学の時代 19 世紀の小説のヒーローは神話の中の神や王族ではなく、研ぎ澄まされた理性によって難事件を解決する探偵だった。

ポーはどのようにして魅力的な探偵デュパンを創造したのだろうか。筆者は、「モルグ街の殺人」の前年に発表された「群衆の人」の中にその痕跡が残されていると考えている。

「群衆の人」に登場する老人は、大勢の人で賑わう繁華街へ出たかと思うと、暗い路地裏に入り、貧民街では飲み屋の明かりを求めてさまよった。老人が好んだのは、光と闇が魅惑的に交錯する夜の街であった。デュパンもまた、夜を好む。「盗まれた手紙」の中でデュパンと語り手の「私」は、明かりを消した部屋に煙草の煙を充満させてパリ警視総監 G―氏を迎える。

> 「もし熟考を要する問題だとしたら」とデュパンは灯心に火をつけるのを控えながら言った。「暗闇の中で吟味するのが得策だろう」
>
> 「相変わらず珍妙なことを考えるもんだな」と警視総監。彼には自分の理解を超えた物事については何でもかんでも「珍妙」と呼ぶ癖があった。[16]

普通の人には「珍妙」としか映らない行動であるが、それゆえに語り手や読者は彼らに魅力を感じ、興味をそそられる。彼らが夜を好むのは、それが光と闇のない交ぜになった空間、つまり理性と狂気の狭間であるからだ。探偵は、証拠をもとに推理するが、ときには普通の人では思いもよらない真相を、ある種の霊的直感によって引き寄せる。デュパンもシャーロック・ホームズも、推理小説の中の探偵には奇癖をもつキャラクターが多い。それは探偵小説の成立の時点で、「探偵」が理性と狂気の狭間に位置する存在として描かれてきたからだろう。

探偵も、ジャーナリストも、作家もそして物語の語り手も、都市とそこに住む個人の秘密を明らかにしようとする「観察者」だ。集団に属さず、鋭敏な視線をもち続けるためには、他人と違っていることを恐れないある種の狂気が必要なのかもしれない。

探偵のもつ闇の側面がある種の狂気だとすれば、光の側面は研ぎ澄まされた理性だ。彼らはわずかな手がかりから真相を導き出すが、そのためには推理、すなわち仮説の検証というプロセスが不可欠だ。探偵は、ちょうど本章で私たちが老人と語り手の行動からその素性を予想したのと同じようにして謎解きをする。いくつかの証拠（検証可能な事実）を積み上げていき、仮説をたて、立証するという手順は科学的な思考法だ。

探偵小説が科学の時代 19 世紀に誕生したのは必然だったのだ。

---

[16]「盗まれた手紙」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』p.80

第三章　ポーの作品群から読む 19 世紀

本章では、ポーの作品群の中から 5 つの作品を取り上げ、彼が表象しようと試みた 19 世紀の姿を多面的に考察する。取り上げる 5 つの作品は、「アッシャー家の崩壊」(1839 年)、「赤き死の仮面」(1842 年)、「黒猫」(1843 年)、「マリー・ロジェの謎」(1842-1843 年)、「軽気球夢譚」(1844 年)である。

3.1「アッシャー家の崩壊」　「ゴシック」から「モダン」へ

これまで取り上げてきた「群衆の人」、「モルグ街の殺人」、「盗まれた手紙」といった作品は、リアリズム的な傾向が強く、呪いや迷信などのゴシックの要素はなかった。しかし、ポーの作品には、寂れた屋敷を舞台にした怪奇話[17]や、埋葬後の死体が蘇る話[18]などのいわゆる「ゴシックホラーもの」も多い。

ここではそんなポーの「ゴシックホラーもの」の中から「アッシャー家の崩壊」(“The Fall of the House of Usher”,1839 年)を取り上げる。理由は、この作品が前章で考察した「群衆の人」の前年に発表された短編小説だからだ。探偵小説の要素である「謎」、「分析」、「追跡」を「群衆の人」に見いだせたように、「群衆の人」を生み出した要素を「アッシャー家の崩壊」に見いだせるはずだ。

冒頭、人里離れた古い屋敷に住む友人を訪ねた語り手は、陰鬱な屋敷をみて驚嘆する。

> [...]なぜかはわからないが、その屋敷を一瞥するやいなや、度し難いほど暗い気分が心に染み込んだ。いま「度し難い」と言ったのは、ふつう人間の心というものは、詩的ゆえに半ば快感を覚える情緒を介在させることによって、仮に目の前に拡がる自然風景がどれほどひどく凄絶なるものであっても、たいてい受け止めることができるものだが、このときわたしが感じた気分は、そうした知的な処理をいっさい許さないたぐいに属していたからである。[19]

「知的な処理をいっさい許さない」のは、それが理性によって解明されない領域の現象だからだ。これだけ読むと、超常的な出来事が起こるまさに「ゴシック」といった作品なのだが、このすぐ後に語り手は屋敷の景観を詳しく観察し始める。

> [...]目の前の景色を追いかけてみよう。まずはアッシャー家の屋敷そのものがあり、その領地の輪郭自体は簡素なるものだ。しかし寒々とした壁や虚ろなる目にも似た窓、繁茂するカヤツリグサ、それに朽ち果てた樹木の白い幹のいくつかに視線を移していくと、

---

17 「アッシャー家の崩壊」(“The Fall of the House of Usher”,1839 年)
18 「早まった埋葬」(“The Premature Burial”,1844 年)
19 ポー「アッシャー家の崩壊」『黒猫・アッシャー家の崩壊　ポー短編集 I ゴシック編』p.155

えもいわれぬほどに魂が沈み込んでいくのだ。[20]

このように、語り手は自分に陰惨な感情を抱かせる景色を観察し、その要因を探る。そして語り手は次のように考える。

> [...]そこで私は考えた、たとえば風景の構成要素を、絵の細部をいまとはちがったふうに組み替えるだけで、陰々滅々たる印象を醸し出している条件自体を修正し、おそらくは粉砕してしまうことさえ可能ではないのか。[21]

ある現象や物事を、その構成要素に分解し、組み替えることでまったく別のものに変えることができるという考え方は、紛れもなく科学的な思考法だろう。「アッシャー家の崩壊」はただのゴシックホラー作品ではなく、科学と理性の時代 19 世紀の思考法が前時代的（ゴシック的）な超常現象に挑戦するという形式の作品でもある。この形式は「群衆の人」に引き継がれ、「モルグ街の殺人」で完成することになる。このような流れの中で作品を捉えると、ポーの題材、そして読者の興味が「ゴシック」から「モダン」へと移行していく過程がよくわかるだろう。

3.2「赤き死の仮面」　ペストの恐怖をエンタメに

次に考察するのは、1842 年に『グレアムズ・マガジン』(*Graham's Magazine*)に掲載された「赤き死の仮面」(“The Masque of the Red Death”)だ。

あらすじは次の通り。

「赤き死」の病が国中を蝕み、臣民の半分近くが死んでしまった。国王は貴族や道化、興行師たちを招いて城に籠城することにした。外界と遮断された城内には美意識に満ちた装飾が施され、あらゆる娯楽が用意されていた。隠遁から 5、6 か月が過ぎたころ、国王は仮面舞踏会を催した。会場となる七つの部屋はそれぞれ、第一の部屋は青、第二の部屋は紫という風にひとつの色で統一されることになった。国王の美的趣向が凝らされた絢爛な舞踏会は美しくもどこか不気味だったが、仮面をつけた参加者はものともせずに踊り続けた。狂気と愉楽の狭間で揺れる舞踏会は、常軌を逸した闖入者の出現で終わりをむかえる。血まみれの衣装をまとい、顔の全面に鮮血の斑点をつけた長身痩躯の闖入者を追って、国王は七つの部屋を駆けてゆき、ついに最後の黒い部屋で追い詰めるとその仮面を引きはがした。国王は戦慄した。その仮面の下には何もなかったからだ。そしてこの瞬間、「赤き死」が城内に入り込んでいることがわかった。仮面舞踏会のメンバーたちが、ひとりまたひとりともがき倒れていく描写で、物語は幕を閉じる。

作中の「赤き死」という疫病は、このころ各地で流行していた「黒死病」すなわちペストを想定している。人々の恐怖の対象であったペストを貴族の狂気じみた仮面舞踏会と結び付け、

---

[20] ポー「アッシャー家の崩壊」pp.155-156
[21] ポー「アッシャー家の崩壊」p.156

娯楽作品としたところに、ポーのエンターテイメント志向の作家性を読み取ることができるだろう。

3.3「黒猫」　酒浸りの狂気と自己嫌悪の文学

ポーを敬愛する作家のひとり、シャルル・ボードレールはポーの飲酒癖について「たしなむのではなく、浴びるように飲む」「アルコール唇に触れたとたん、バーカウンターに直行して立て続けに何杯もあおり、そのうち彼の中にある善意の天使は溺れ、あらゆる知性が破壊される」[22]と書いている。

そんなポーが 1843 年、雑誌『ユナイテッド・ステイツ・サタデー・ポスト』(*United States Saturday Post*)に発表した「黒猫」(“The Black Cat”)には、作者を投影したようなアルコール中毒の男が登場する。同作はポーの代表的なホラー小説として、古来の黒猫にまつわる迷信・伝説を題材にした作品だと紹介されることが多い。

確かに「黒猫」は、凶兆の徴とされる黒猫が語り手の家に住みついたことで幼少期には心優しかった語り手が狂気の行動へ駆り立てられる、という物語として読むことができる。しかし、本章では語り手の男の飲酒癖に焦点をあててこの作品を捉えなおしたい。というのも、ポー自身はその飲酒癖で有名だったにもかかわらず 1849 年に禁酒同盟に参加しているからだ[23]。ポーは嫌なことを忘れさせてくれる酒に幾度も溺れながら、そんな自分の飲酒癖を嫌悪していた。この相反する想いが彼に「黒猫」を書かせたのではないだろうか。

当時、ヨーロッパでは禁酒運動が盛んだった。1829 年にアイルランドで禁酒運動団体が発足し、1830 年代にはスカンジナビア諸国、スコットランド、イングランドでも団体が発足した。アルコール中毒は当時の社会問題だったのだ。アメリカで禁酒運動が本格化するのは 19 世紀後半になってからのことだが、海外で暮らした経験もあり、雑誌編集の仕事柄トレンドに敏感であったポーならこの社会問題を題材にできたはずだ。

凶兆の象徴としての黒猫が男を狂気に誘う物語と捉えると、「黒猫」は中世的な迷信・伝説を扱ったホラー小説ということになってしまう。しかし、当時の社会状況と照らし合わせて、飲酒による理性の崩壊をホラーに仕立てたのだと捉えると、当時としては最先端の社会問題を扱った実験的な作品だったと解釈することができるだろう。

3.4「マリー・ロジェの謎」から読むメディアリテラシー

「マリー・ロジェの謎」(“The Mystery of Marie Roget”)は、雑誌『スノウデンス・レディース・カンパニオン』(*Snowden's Lady's Companion*)の 1842 年 11 月号、12 月号、1843 年 2 月号に分載された短編小説である。この小説は、前年の１８４１年にアメリカのニューヨ

---

[22] マシュー・グッドマン(Matthew Goodman)『トップ記事は、月に人類発見！　十九世紀、アメリカ新聞戦争』p.235

[23] ポーはその年の 10 月 3 日、ボルチモアの選挙投票所に使われた酒場で、おそらくは政治的謀略に引っかかって酒を飲まされ、意識不明となったところを発見された。とうとう意識は戻らず、10 月 7 日に息を引き取った。

ーク州で実際に起こった「メアリー・ロジャース事件」を題材に取っている。登場人物の名前と事件の起こった場所こそ違うが、人物同士の関係性や発言は新聞等の報道からほとんどそのまま引用されている。捜査が行われている只中の事件の謎を、小説内の探偵（オーギュスト・デュパン）が推理するという体裁でかかれた作品だ。

「探偵が事件を推理する」といっても、「マリー・ロジェの謎」ではデュパンは事件現場に赴いて捜査をしたりはしない。彼は日々各社の紙面をにぎわせる事件の記事を読み、証人の発言の矛盾や記者が見落とした重要な証言を参考に事件の真相を推理する。物語がこのような形式になったのは、小説を書いたポー自身が、「メアリー・ロジャース事件」の報道を新聞で見て作品を書いたためだ。小説は三回に分けて連載されたが、その間に新しい事実が発覚すると、作中の探偵デュパンもその記事を読んで自身の推理を修正する。ただし、デュパンは無批判に新聞の報道内容を信用することはない。記者が思い込みで書いていることや、新聞社が事件を報道するときに被害者に肩入れする傾向なども考慮して、思いもよらない事件の真相を見抜く。

今も昔も、記者は完全に客観的な視点で記事を書くことはできないし、新聞各社はそれぞれのバイアスをもって報道するものだ。産業としてのジャーナリズムが登場したばかりの 19 世紀にすでにこうした題材を扱っていたことを考えると、ポーがいかに先見の明をもった作家であったかがわかる。

しかし、この小説が雑誌に掲載された作品であり、本当であるかどうかより、面白さを優先して書かれたエンターテイメントであることも忘れてはならない。実際、この小説内でデュパンがたどり着く真相は事実とは異なっている。小説内では、被害女性（マリー・ロジェ）の死体にはスカートの切れ端が腰の周りに巻きつけてあり、死体を持ち運ぶための吊り紐のようになっていたとされているが、実際にメアリー・ロジャースの死体を水中から運び上げた二人の証人は、この「吊り紐」についてはまったく述べていない[24]。ポー（および作中の探偵デュパン）は、犯行がギャング団ではなく一人の男によって行われたと主張したかった。警察の発表や新聞の報道からわかる一般的な見解とは逆の真相を提示することで、読者に驚きを与え、関心を集めることができるからだ。

新聞報道のいいかげんさを糾弾するこの小説自体が、事実を都合のいいように（面白くなるように）書き換えたフィクションであるということ。「マリー・ロジェの謎」に限らず、どんな書き手の書いたどんな記事・小説であっても、「何を書いて、何を書かないか」を選択している時点でそこには書き手自身の意志が反映される。ある事件に真相があるとして、数々の証拠から明らかにされた事実があるとしても、それを伝える側が事件をどのように伝えたいかによって書かれ方は変わってくる。読者を面白がらせることしか頭にない作家はよりスキャンダラスで意外性のある事実を前面に出して書くだろうし、道徳的なことを主張したい新聞社は破廉恥な女性が巻き込まれた事件を嫌悪すべき対象として報道するだろう。まったくの善意であったとしても、殺人事件を報道するという選択をした時点で「殺人は悪」とい

[24] ウィルソン「ポーを魅了したミステリー、メアリー・ロジャーズ事件」『殺人の迷宮』p.15

う規範意識を読者が共有することを言外に要求している。

純粋に客観的な事実が存在するとしても、それを誰かに伝えようとする時点でそこには何らかの意図（「面白がらせよう」「同意させよう」「考えてもらおう」）が生じる。今日フェイクニュースが問題となっていることからもわかるように、多くの人が自分の意見を主張する場を持つようになれば、必然的にひとつの事実に対する見解や解釈が無数に存在するようになる。それを都合のいいようにまとめれば、それが一般的な見解であるかのように装うことができるし、そう信じ込むこともできる。ポーが「マリー・ロジェの謎」で提示した新聞報道に対しての批判的態度や、言説それ自体のフィクション性を考えることは現代でも重要だ。

3.5「軽気球夢譚」はフェイクニュースか

第一章では、『メディア都市パリ』を取り上げ、19 世紀のパリの出版産業を考察した。では、ポーが創作活動を行ったアメリカの出版産業はどうだったか。グッドマン著『トップ記事は、月に人類発見！　十九世紀アメリカ新聞戦争』(*The Sun and the Moon: The Remarkable True Account of Hoaxers, Showmen, Dueling Journalists, and Lunar Man-Bats in Nineteenth-Century New York*,2010 年)によれば、状況はヨーロッパと似たようなものだったらしい。

ニューヨークにもヨーロッパの都市に負けない大都市が形成され始め、人口が集中し治安や公衆衛生は悪化した。人々はコレラに怯え、殺人事件に恐怖した。そんな時代に人々が娯楽を求めるのは必然というべきで、貧しい者は安価な娯楽として一部一ペニーの新聞『サン』(*The Sun*)紙を読むようになった。『サン』紙がどのような新聞であったかは、同紙の大ヒット記事が、喜望峰にある天文台でなされたという月に関する眉唾ものの発見[25]を報じたものであったことから明らかだろう。人々は月の法螺話を毎日の楽しみとしていたのだ。挿絵入りの版も、イギリス、イタリア、ドイツ、フランスで発刊された。当然のなりゆきとして『サン』紙は世界で最も読まれる新聞となった[26]。

グットマンは、当時一大センセーションを巻き起こした『サン』紙がアメリカで誕生したのは偶然ではなかったと主張する。

> [...]当時のニューヨークは、階級や人種、さらには奴隷制のような根深い論争に端を発する社会摩擦によって、内部から分裂を起こしている街でもあった。そんな混沌の中で生まれた新しい新聞は、一部のエリート事業主だけの情報媒体だけでなく、大衆に広く開放されたマスメディアだった―特定の政党に属さず、一般庶民に向けて、犯罪、スキャンダル、スポーツ、エンターテイメントといった、今日まで多くの新聞に引き継がれている内容を提供したのである。まさにジャーナリズムの革命といってよく、一八三〇年

[25]グットマン『トップ記事は、月に人類発見！　十九世紀、アメリカ新聞戦争』p.26（月には湖や滝や森があり、「ヒトコウモリ」が住んでいる、というもの。実際はリチャード・アダムス・ロックというジャーナリストの創作だった。）

[26] グットマン pp.24-26

代半ばにニューヨークで始まったその革命は、アメリカ全土に広がって、国民が新聞を読む国をつくりあげた。[27]

階級や人種間で軋轢が生じ、奴隷制などの社会制度をめぐって内部で分裂が生じている社会では、一部のエリートのためではない大衆新聞が好まれる。新聞が普及する条件は、識字率や人口集中など様々なものが考えられるが、グットマンのこうした指摘も重要だろう。そう考えると、階層・人種間の分断が社会問題となり、エリートに対する不満がポピュリズムとして噴出している現代は、『サン』紙のようないかがわしいメディアが普及する条件を満たしているように思える。SNS やまとめサイトを通じてフェイクニュースが出回っている現象は、裏を返せば、ネットメディアがかつての『サン』紙のように人々に娯楽を提供している、ということなのかもしれない。

ポーは 1844 年、そんな『サン』紙に短編「軽気球夢譚」(“The Balloon-Hoax”)を掲載した。大陸間飛行を（嵐によって偶然にも）成し遂げた気球の詳細な記述と冒険談が語られるのだが、彼は前述のロックの三文記事を真似て、本物のニュースという体でこれを新聞に載せた。同紙は「たちまち売り切れダフ屋まで出るなど、一大センセーションを巻き起こす」[28]。科学的な裏付けがあるような記事、それも劇的なニュースを好む市民の心理をよく理解していたからこそ、このような作品を書くことができたのだろう。

しかし、だからといって当時の読者がいかがわしい記事を鵜呑みにする愚かな大衆であったと言い切ることはできない。『サン』紙の記事が眉唾ものであることは誰もが知っていたからだ。それでも、事実と取ろうが、でっちあげと取ろうが、誰もがそれを読みたがった。人々は日々の楽しみになる面白い読み物を求めていたのだ。

こうして、フィクションとファクトの境は緩やかに溶けていった。それは私たちが「ポスト・トゥルース」や「フェイクニュース」と呼んで危険視する状況と似たようなものだったに違いない。

---

[27] グットマン p.26

[28] 巽「年譜」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』p.278

第四章　「ポスト・トゥルース」時代　再考

本章では、視点を 21 世紀の現代へと戻し、これまでの議論を踏まえて「ポスト・トゥルース時代」を再考する。中世から近代への移行とそれに伴う社会通念の変化を見てきたことで、現代のパラダイムシフトをより客観的に捉えることができる。まずは、現代の情報の混乱を問い直す言葉として本稿で何度も引き合いに出した「ポスト・トゥルース」の意味を確認する。

4.1「事実」よりも「信じたいウソ」

「ポスト・トゥルース」とは何か。それについてはさまざまな解釈があるだろうが、たとえば日比嘉高は『「ポスト真実」の時代 「信じたいウソ」が「事実」に勝る世界をどう生き抜くか』(2017 年)の中で、Oxford English Dictionary（OED）の定義を引用しながら以下のように述べている。

> 2016 年の「今年の言葉」として、オックスフォード英語辞書は「ポスト真実 post-truth」を選んだ。同辞書はこの言葉を次のように定義した。
>
> > “世論を形成する際に、客観的な事実よりも、むしろ感情や個人的信条へのアピールの方がより影響力があるような状況”について言及したり表したりする形容詞
>
> 発表の際の解説でオックスフォード英語辞書は、この言葉は 10 年ほど前から存在していたが、2016 年のイギリスにおける EU 脱退の国民投票、およびアメリカ大統領選挙の文脈において、その使用頻度が急上昇したと述べている。
>
> また、「ポスト～」という接頭語について、もともとある状況や出来事の「後」を指している言葉にすぎなかったものが、「ある概念がもはや重要でなくなったり適切でなくなったりしたような時期に属している」というニュアンスで用いられることが増えていると指摘している。20 世紀半ばから現れた使い方であり、「ポスト国家」や「ポスト人種」などという用法が、これに類する例だという。
>
> つまり「ポスト真実」とは、いまや現代は「真実」がもはや重要でも適切でもなくなった時期に属している、というわけである。[29]

「ポスト真実」という言葉が頻繁に使われだしたのは、イギリスの EU 離脱の国民投票やアメリカ大統領選挙においてポピュリズム政党やその支持者の言動が注目を集めた頃からだ。そのためもあってか、現代の政治を論じる際に用いられることが多い。しかし、日比は「ポスト真実」は政治だけでなく、そうした政治手法を可能にする現代的条件、つまり社会や文

[29] 日比『「ポスト真実」の時代 「信じたいウソ」が「事実」に勝る世界をどう生き抜くか』p.14

化全体を考える際にも有用だという[30]。

また、日比いわく、ポスト真実の社会を構成する要素は「ソーシャルメディアの影響」「事実の軽視」「感情の優越」「分断の感覚」[31]の４つだという。以下ではこの４つの要素について簡単に説明する。

「ソーシャルメディアの影響」

情報の作成者と享受者が入りくんでいるソーシャルメディア上では、コミュニティーの参加者が自分の共感できる投稿ばかりを表示するようにフィルタリング及びカスタマイズできる。そうした機能が自分と相いれない主義主張を不可視化し、社会的分断が起こりやすい状況を作り出している。

「事実の軽視」

トランプ大統領のように、自らの主張に合わなかったり不都合だったりする情報や事実を「フェイクニュース」だと非難する政治家の言動に端的に示されるように、人は本当かどうかより信じたいかどうかで自分にとっての真実を選び始めている。オーストラリアの辞典マッコーリーは「フェイクニュース」を 2016 年の「今年の言葉」に選出したが、辞典の編集者は会見で、フェイクニュースは「そのニュース・ストーリーが事実であるか否かにかかわらず、人々はみずから信じたいものを信じ始めている」[32]状況を示す言葉だと述べた。また、反科学の傾向も、「事実軽視」のポスト真実社会の特徴だ。検証可能な事実を積み上げて世界を理解し、改善していこうという科学的な態度は、ポスト真実の政治では重視されない。「ポスト真実の政治がもつ反科学の姿勢は、社会と科学とのつながりを脆弱なものとしていく。関連予算の削減によって科学を弱体化させるだけでなく、科学を軽視する姿勢を政権中枢が示し続けることにより、科学に対する社会の敬意が毀損されていってしまう」[33]。さらに、「科学の進歩が必ずしも市民の幸福や豊かさに結びついていないとみなす風潮」[34]も反科学の現れである。

「感情の優越」

この現象は、人々が公的な政治参加（選挙における投票や立候補）ではなく、路上に出てデモを行ったり、ソーシャルメディアを利用したつながりによって組織を立ち上げたりしている状況によく現れている。また、「事実」に対する無数の解釈があふれている現代では、人は精神衛生を保つために多すぎる情報を制限したいと思うようになる。フィルタリング機能は、利用者が欲しい情報だけ表示するように設定できるから、必然的に自分の「気持ち」を害さない情報ばかり消費してしまう。

「分断の感覚」

グローバル化・多文化化が進行し、多様性が称揚される一方で、グローバル化の恩恵にあ

---

[30] 日比 p.5
[31] 日比 p.25
[32] 日比 p.31
[33] 日比 p.34
[34] 日比 p.34

ずかれない主流派（白人）労働階級の鬱憤が排外主義的で自国優先的な政治的主張の苗床になっている。また、各地で頻発するテロが否応なしに「融和」か「拒絶」かの選択を個人に迫っている状況も、人々に分断を意識させる要因となっている。

ポスト真実の社会を構成するこれら４つの要素は、互いに関連し、影響しあいながら現代の混乱した状況を作り上げている。前章の考察を踏まえて考えてみると、「メディア」「事実」「(反) 科学」「多様化」といったキーワードは、産業革命以降の産物であることがわかる。産業革命から生まれ発展してきたこれらの技術や思想は、長い年月をかけて社会通念を変化せ、今日の社会を作った。しかし、それが今軋みを見せ始めている。

4.2 トフラーの予言 「第三の波」によるパラダイムシフト

これまで述べてきたように、科学は産業革命以降の人々の思考法・価値観に大きな変化をもたらした。

科学的思考法と合理主義は資本の拡大再生産につながり、人々は物質的に豊かになった。そのため科学と合理化は「正しいこと」とされ、資本主義社会を支える価値観のひとつとなった。19 世紀に科学が「新しい正義」として人々の心を捉えたのは、それが豊かさや幸福をもたらしたからだ。

しかし、今日の科学は以前ほど人々の豊かさや幸福に貢献していないように思える。それはなぜか。トフラーは『第三の波』の中で、その原因を「エネルギー問題」にあると主張した[35]。「第二の波」（産業革命）以降の主要なエネルギー源は、石炭や石油といった再生不可能なものだった。資源が潤沢に存在し、分配が滞りなく行われているうちはいいが、石油・石炭の埋蔵量に限りがあることが世界中の人に意識され、資源をもつ国ともたない国の間で経済の摩擦が深刻化するようになると、人々は以前ほど楽観的ではいられなくなってくる。新聞でも教育の現場でも、南北問題は主要なトピックスになった。科学主義によって手にした豊かさが、実は誰かの不幸に支えられていたという認識は誰にとっても心地いいものではない。環境汚染の問題や原発の事故はそれに拍車をかけ、科学に対する不信感を生んでしまった。こうした認識が広まったのは、通信技術の発達とグローバル化によって世界中の情報媒体で同じ問題が取り上げられるようになったからだ。「第三の波」（情報革命）は科学の息子でありながら、反科学の思想を人々に伝播することに大きく寄与してしまった。

またトフラーは、「第三の波」による情報の氾濫は、私たちそれぞれのもつ「現実の心象モデル」[36]にも大きな変化をもたらしたという。ここからは、「第一の波」（農業革命）、「第二の波」（産業革命）、「第三の波」（情報革命）のそれぞれが人々の「現実の心象モデル」をどのように規定してきたのかを見ていきたい。

「第一の波」の影響下にある村や集落などの小さい共同体に生まれた子供たちが持った世界像は、「極端に狭いものだった」[37]。小さな共同体では、親や教会や学校が提示する共通の

---

[35] トフラーpp.180-190
[36] トフラーp.215
[37] トフラーp.216

価値観の中で子供は育つ。すると子供は家業を継いだり、教会の神父を目指して勉強に励んだりするのを「あたりまえ」のこととして成長する。誰もが同じような価値観をもっているので、変化や多様性は生じにくい。

それに対して、「第二の波」の影響下にある人々の世界観は、「第一の波」の人々より広く多様になった。第一章から第三章までで繰り返し述べてきたように、新聞や雑誌などのマスメディアが自分の住んでいる国や地域への帰属意識を掻き立て、科学的・合理的な思考法が生み出した資本主義が新たな成り上がりの道を提示した。ポーはこうした人々の考え方の変化を捉え、自分の作品で扱う題材を「ゴシック」から「モダン」へシフトさせた。

それでは、「第三の波」の影響下にある私たちの世界観は、「第二の波」の人々より広く多様になったのか。確かに一面的にはそう言えるかもしれない。マスメディアの成熟とネットメディアの発達によって世界中の情報がたくさん手に入るようになった。私たちはどこにいても、円やドルの値動きを知ることができるし、地球の裏側で起きた事件や災害についての情報を得ることができる。これは「想像の共同体」が拡張した結果だろうか。情報革命は私たちに、ひとつの連帯に属している感覚を与えただろうか。

テレビや新聞を見れば、各地で頻発するテロや貧富の差の広がりがいつも話題に上がっている。SNS では大統領の差別的な発言が切り取られ、人種間の分断を煽っている。体感的には、情報革命によるメディアの多様化は共同体の拡大とは全く逆の状況を作り出しているようにさえ感じる。それは、前節で述べたように、ソーシャルメディアのフィルタリング機能やカスタマイズ機能が個人にとって心地よい情報ばかり表示させるからかもしれない。もしくは、どんな意見も言うことができて、どんな意見も探すことができるインターネットの特徴が、人々の価値観や文化を過剰に多様化し、「同じ共同体・文化圏に属している」という感覚を共有しにくくしているためかもしれない。いずれにせよ、情報革命が私たちの生活をより豊かで幸せにしてくれるという楽観的な期待は急速に失われつつある。最近では「ポスト・トゥルース」や「フェイクニュース」といった言葉がテレビ・新聞で取り上げられると、知識人は多様化したメディアの負の側面について警鐘を鳴らすようになった。

4.3「モノ不足、情報余り」の現代

情報革命によるパラダイムシフトがあったとすれば、私たちの価値観はどのように変わってしまったのだろう。堺屋太一の著書『知価革命―工業社会が終わる 知価社会が始まる』（1985 年）を参考にして考えてみたい。

堺屋は、人間には豊富な資源をたくさん使い、不足している資源を大切にすることを美徳と感じる「やさしい情知」[38]があると主張した。堺屋もトフラーと同様、現代の大きな変化の

---

[38] 堺屋『知価革命―工業社会が終わる 知価社会が始まる』より。

> 人間はまことに利口な動物であり、いつの時代、どこの地域でも「豊富なものをたくさん使うのは格好が良い」と考える美意識をもち、「不足なものは節約するのが正しいことだ」と考える倫理観をもつ。(p.37)

主要因はエネルギー危機であると述べている。堺屋は日本の経済学者なので、具体例として挙げるのは戦後の高度経済成長に待ったをかけた「石油危機」だ。

石油危機以前、第二次世界大戦から 1950 年代にかけて、中東において巨大な油田が次々と発見された。

> 安くて豊富なものがあれば、それを使って何かいいことをしようと考えるのが人間の「あさましさ」だ。石油があり余り値下がりすれば、たちまちいろんな所に石油が使われ出す。エネルギーとしても化学工業の原料としても石油が大量に使われる。新しい技術と結びついて合成化学のような新産業が興り、合成繊維やプラスティックが石油から安価に作られ出す、といった具合だ。[39]

石油が豊富に手に入るようになると、「モノ余り現象」[40]が化学工業とエネルギーの転化を通じてあらゆる資源・農産物をあり余らせた。

しかし、石油危機以降「モノ余り現象」は終息し、資源不足と高いインフレ率が続く「モノ不足」の時代がやってきた。何が豊富で何が不足しているかが変われば、人間の「やさしい情知」は美意識と倫理観を変化させる。こうして、物に対する執着は次第に薄れてゆき、家電や自動車の広告では「省エネ」がキャッチフレーズとなった。

「モノ不足」の時代になると、人々は物を対象にした具体的な思考（科学的な思考）より、資源を浪費しない抽象的な思考（精神的な思考）を好むようになる。こうした価値観の転換は歴史上で何度か起こっている。

そう、「モノ不足」なのは現代ばかりではない。「第二の波」の到来以前の、中世キリスト教社会もやはり「モノ不足」であり、高度な抽象文明が発達した時代だった。

中世は、ギリシャ・ローマ文明という古代科学文明が森林などの資源をほとんど使い尽くして滅びてしまって後、産業革命で再び「モノ余り」に転じるまでの時代だ。中世の「モノ不足」は現代よりさらに深刻で、冷害や干ばつによってその年の作物が育たなければ餓死してしまうこともあった。そんな時代には、宗教など心を平穏に保つための抽象思想が世の中を支配した。岡田斗司夫は『評価経済社会　ぼくらは世界の変わり目に立ち会っている』（2011 年）の中で、この時代の労働と抽象的思考について以下のように語っている。

> 意外なことに中世の人たちにとって、“勤勉”とは泥棒と同義の犯罪的行為でした。というのは、一人がたくさん働けば、結果的に他人の土地や資源を奪うことになるからです。中世の人々は、いくら働いても貧乏なかわいそうな人々ではありません。「貪欲は悪」という価値観に生きていたのです。
>
> [...]中世においては、「働くべき時に働かない」よりも、「働くべきでない時に働く」

[39] 堺屋 pp.30-31
[40] 堺屋 p.32

方が、ずっと重い罪だったのです。[41]

そんな中世では、「不足するモノを節約し、有り余る時間をいっぱい使う」生き方をする「清貧な思想家」が尊敬を集めた。科学や実験といった、現実と関連するものではなく、魔女の研究やデフォルメされたマリア像など、現実的なものとは無関係の抽象的・心象的な思想が好まれる時代だった。ヨーロッパのゴシック建築を見ればわかるように、教会も実用的で簡素なものより神の神秘性を表現した荘厳で大仰なものが好まれた。

「モノ余り」の近代人は、この時代を「暗黒の中世」と呼ぶ。迷信や厳格な戒律が自由な発想と理性を奪ったと考えるからだ。本当はそうではない。小氷期で資源も食料もなく、日々の暮らしだけで精一杯だった中世の人たちは、持てる者から持たざる者への施しを善とする宗教を心の拠り所とした。来世の存在を信じて祈ることが、毎年飢えと寒さにさらされる人々の心をどれだけ安定させたことだろう。中世のキリスト教社会は、「モノ不足」を生き延びるための高度抽象（精神）文明だったのだ。

そんな中世の抽象文明も、新大陸の発見と「第二の波」産業革命を経て終わりを迎える。19 世紀は「モノ余り、時間不足」の時代に突入した。資源の有限感は薄れ、具体的思考が好まれるようになった。石炭や鉄などのモノをたくさん使って移動時間を短縮する蒸気船・鉄道が生まれた。20 世紀になってもその流れはとどまらず、大量生産・大量消費が世界経済を回す原動力とされた。

しかし、20 世紀後半に起こった二度の石油危機は、前述のように資源の有限感と世界の閉塞感を意識させる。そして再び「モノ不足」の時代に突入した。

インターネットが発達した 21 世紀は情報であふれかえっているので「モノ不足、情報余り」の時代だ。「やさしい情知」の理論からすれば、人々は再び抽象思考を好むようになるはずだ。しかし、中世のように天国や極楽浄土を信じて現世をつつましく生きるということはできない。そのため、人々は「自分の気持ち」を大切にし、お金や物がなくても楽しく生きられるように「体験」や「人間関係」に時間を投資するようになる。有り余る情報を消費することが美徳になるので、動画サイトの利用者が増え、アニメやゲームなどの膨大なコンテンツを浴びるように摂取するようになった。反対に物に対する執着は薄れ、車やファッションにはお金を使わなくなった。お金にならないアマチュア活動の活発化や、SNS によって「つながり」の輪を最大化しようとする動きは、現代人の「やさしい情知」の変化を物語っている。

4.4 価値観の変化　「今」に対する違和感と嫌悪感の正体

40 年前の大阪万博のスローガンは「人類の進歩と調和」(Progress and Harmony for Mankind)[42]だった。科学によって人類はどんどん豊かになって、いつの日か世界から争いをなくすことができるだろう、と人々は考えていた。科学技術の進歩によって世界中の人々が

---

[41] 岡田斗司夫『評価経済社会　ぼくらは世界の変わり目に立ち会っている』pp.105-106

[42] 万博記念公園ホームページ(http://www.expo70-park.jp/cause/expo/;閲覧日 2017 年 12 月 27 日)

豊かになるので、人類は資源を分かち合い、分かり合えると思われた。そのためコスモポリタン的な思想が潮流となった。また、経済を回す原動力となる仕事と消費が推奨された。当時の人気職業はサラリーマン。毎年発売される新型の家電を稼いだ給料で買った。当時は、新しいものを持っていることが豊かさの指標だったからだ。

現代、石油の埋蔵量が無限ではないことや、原子力が万能ではないことに気がついてしまった私たちは、「エコロジー」を合言葉にして資源の節約を推奨するようになった。憧れの職業ランキングの上位は「もの」を提供する職業ではなく、サッカー選手や野球選手、ユーチューバーなどの「感動」を提供する仕事で占められるようになった。「新品のものが欲しい」という欲求は薄れ、ひとつのものをみんなとシェアすること、時間を人間関係の構築に投資することを美徳と感じるようになった。このようにして、私たちの「やさしい情知」は少しずつ変わり始めている。ただ、その変化には個人差がある。同じ集団の中に異なる価値観をもつ人が同居している状況では、不安や混乱が生じやすい。

前節で述べたように、「モノ不足」の時代は抽象的・心象的な思考が好まれる。アニメの舞台となった地域を「聖地」と呼ぶアニメファンの言動に表されるように、中世におけるキリスト教の役割を現代では映画やアニメなどの多様化したコンテンツが担っていると考えることもできる。

心象的思考の優越はコミュニケーションの場にも反映されている。Twitter の短文でのつぶやきや LINE のスタンプでの会話は、コミュニケーションの中心を手紙やメールなどの文章型からニュアンス型に変えてしまった。人々は文章で論理的に自分の意図を説明することより、言い回しや気持ちを表すスタンプで意図を汲み取ってもらうことを求めるようになった。ニュアンス型のコミュニケーションの特徴は、そのコミュニティーに属している人しか正確に意図を汲み取ることができないことだ。若者言葉がテレビニュースで取り上げられるたび、年配のキャスターが眉を顰めたり苦笑いしたりするのは、単に言葉の乱れが嘆かわしいからでなく、その集団から疎外されている感覚を受け取って不安や違和感を覚えるからだろう。

遊んでいるだけのように見えてユーチューバーを嫌う人。現実を見ていないように思えてアニメファンの言動に違和感を覚える人。格差の拡大や民族紛争の激化を見て世界が分断されていると嘆く人。彼らの気持ちを「わかるな」と感じている人は多いだろう。パラダイムシフトによって価値観が変わっていくのを受け入れられない心が、世の中への違和感や嫌悪感を訴えている。

4.5 不安の受け皿としての文学

19 世紀には小説が、20 世紀には映画が表現の最先端として、その時代特有の不安や違和感を扱ってきた。「文学」を、その時代が抱える問題を最先端の技術で人々が楽しめるように表現したものだと考えるならば、21 世紀の文学の最先端は漫画かもしれないし、アニメーションかもしれない。

たとえば 2016 年には、日本で『君の名は。』というアニメーション映画が大ヒットした。この作品には、東京に住む男子高校生と田舎に暮らす女子高校生の二人が主人公として登場

する。ある朝目覚めるとこの男女が入れ替わっている、という設定だ。筆者は、『君の名は。』の大ヒットの要因は現実より美しい東京と田舎の情景描写にあったと考える。楽しくにぎやかな部分が強調された東京の生活や、荘厳で神秘的な部分が強調された田舎の祭事。美しく輝く高層ビル群の窓ガラスと、ジブリ作品を思わせる雄大な自然。これらの美しい情景描写は、東京や田舎に住む私たちの生活を無条件に肯定してくれる気がする。実際には、東京に暮らすのは孤独で息苦しいかもしれないし、田舎で暮らすのは不便でやるせないかもしれない。作中でも、主人公の友人が地方で暮らしていくことの漠然とした不安を口にするシーンがあった。それでも、こうして美しい東京・田舎を描かれると、「こんな生活も悪くないよな」と思えてくる。『君の名は。』は現代人の不安をよく捉え、私たちの生活を肯定的に描いたからこそ、多くの観客に評価されたのだろう。

ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞によって、文学とは詩・戯曲・小説のことであるという一般的な認識は時代遅れになった。カウンターカルチャーに身を投じた 1960 年代の若者たちの代弁者とされた彼は、『風に吹かれて』(*Blowin' in the Wind*,1963 年)や『時代は変る』(*The Times They Are a-Changin'*,1965 年)、『ライク・ア・ローリング・ストーン』(*Like a Rolling Stone*,1965 年)などの既存の価値観への反抗や逸脱を思わせる曲を書いた。戦後のベビーブームで生まれた世代とその親世代の軋轢の結果がヒッピー文化やロックなどのカウンターカルチャーなのだとすれば、ディランはその価値観のシフトをよく捉えて創作活動をしたアーティストだったといえるだろう。

私たちが普段何気なく見ている映画やアニメも、それが誰かの興味なり感動を呼び起こしているということは、私たちの抱える何らかの不安や違和感、好奇心を「面白さ」に転化した「文学」だ。したがって、「文学」に対する向き合い方を考えることは私たちの「今」を考えることであり、他人ごとではない。小説でも映画でも、アニメでも音楽でも、作品が人の心を動かすのにはそれなりの訳がある。第一章で述べたように、私たちが現実そのものだと思っている「事実」も、小説やその他の文学と同じように現実から作り出されたある種のフィクションだ。文芸批評が文学作品を読み解くだけでなく現実の諸問題を考えるのにも有用な理由はここにある。

4.6 あたらしい不安　「ヒト不足」の時代

これからの文学で扱われるだろう不安や違和感、好奇心とは何か。

家族観・恋愛観の変化、労働形態の変化、人口減少社会の不安、AI 技術の実用化、日常に遍在するテロ、人種・民族・階層間の分断、学級崩壊、いじめ、自殺、地方の過疎化・高齢化、社会保障費の上昇、国民国家体制の崩壊、経済破綻、超国家企業の侵出、遺伝子操作の倫理的問題、ポピュリズム、そして「ポスト・トゥルース」。序論で、これらの社会問題は「第二の波」と「第三の波」がぶつかり合うことで生じていると述べた。現在、個々の問題に対して議論や解決策の検討が行われているが、本稿では基本的にこれらを避けられない問題として扱う。巨大なパラダイムシフトに伴う社会不安の増加や混乱に対して個人ができる現実的な施策は、不安に煽られてがむしゃらに行動を起こしたりあきらめて世捨て人のよ

うに引きこもったりすることではなく、問題を正確に理解しようとすることと、面白く解釈して楽しむことだと思うからだ。

たくさんの社会問題があるが、その中でもとりわけ深刻なのは「人口減少」だ。2017 年に出版された新書『未来の年表　人口減少日本でこれから起きること』では、人口減少社会の日本でこれから起きることが紹介されているのだが、そこにはなかなかショッキングな見出しが並んでいる。「2018 年　　国立大学が倒産の危機へ」、「2024 年　3 人に 1 人が 65 歳以上の「超・高齢化社会」へ」、「2026 年　認知症患者が 700 万人規模に」、「2035 年　「未婚大国」が誕生する」、「2040 年　自治体の半数が消滅の危機に」[43]といった具合だ。この本には人口減少による社会問題を解決し、混乱の少ない未来に軟着陸させる方法も提案されているのが、本稿で注目したいのは、肝心の人口減少自体は止めようがないという事実だ。他の先進国に先駆けて「ヒト不足」の社会に突入する日本では、これから思いもしない変化が起きるだろう。そんな未知の社会を考えるためのヒントはやはり歴史にある。

中世のキリスト教社会を見ればわかるように「モノ不足」の時代には精神文明が発達する。キリスト教とは、「モノ不足」の時代を生き抜くための倫理・道徳・美徳を示す体系化された思想だった。現代でその役割を担っているのは映画、アニメ、ゲームだと筆者は考える。なぜなら、現代ではおそらく学校の道徳の時間より、子供のころから親しんでいる少年ジャンプの方が私たちの道徳観に与える影響が大きいからだ。現代はまた「ヒト不足」の時代でもあるので、自分や周囲の人の「気持ち」や「健康」を大事にするようになるだろう。それは、子供が小学校高学年になってもサンタクロースを信じられる家庭が理想で、健康を保つために酒もたばこもやめることが立派といわれる現状にも表れている。

「ヒト不足」だと、自分や周囲の人の「気持ち」を大事にするようになる、といったが、それは自分の意見を持つことを個人の成長と考えるこれまでの価値観とは真逆のものだ。そもそも「情報余り」で価値観は多様化するから、ひとつの意見を頑固に主張しすぎると周りのだれかの「気持ち」を傷つけてしまうことになる。「情報余り」の社会は単純にニュースの量が増える社会ではなくて、ひとつのニュースに対する無数の解釈があふれる社会だ。どんな意見にもそれに反対する意見、相対化する意見がすぐに見つかってしまうため、自分の意見を持ちにくくなる。そのため未来では周囲から「いい人」といわれる人ほど相対主義的になっていくだろう。それはある意味では、近代人の病理ともいわれる「自我」や「自意識」から個人が解放されることなのかもしれない。

このような変化の時代には、当然社会不安は大きくなる。そして、同時に人々の不安を扱った新しい「文学」がたくさん現れてくるだろう。19 世紀のそれは小説だった。しかし、ネットメディアの発達によってメディアは国家や企業といった権威から個人へ解放された。新聞がブログやまとめサイトに取って代わり、テレビが YouTube などの動画配信サイトに取って代わっている現状からそれは明らかだ。

---

[43] 河合「目次」『未来の年表　人口減少日本でこれから起きること』pp.14-15

個人がメディアになれる現代、不安を面白さに転化する役割を担うのは「私たち」だ。それは大袈裟なことではなく、SNS 上での発言に少し気をつかったり、コンテンツをもっと面白がるために背景知識としての歴史を参照したり、「頑固」になりすぎないようにいろんな人との関りを維持したりするだけでいい。一番大事なのは、変化の波を恐れたり不安がったりするのではなく、歴史の流れの上で俯瞰的に捉え、変化自体を面白がってしまうことだ。

「ポスト・トゥルース時代」のポーは、私たちだ。

結論　ポーの目を借りて

私たちが「あたりまえ」だと思っている道徳・倫理・美徳といった価値観は、実は普遍でもなんでもなく、技術の進歩や資源の余剰・不足の転換によって歴史上何度も変わってきている。変化のたびに社会は混乱するが、そういうときほど面白い「文学」は生まれやすい。本稿で主張したかったことは、言ってしまえばそれだけだ。わけもわからず変化に飲み込まれているときには不安になるが、わかってしまえば対策も立てられるし、変化自体を面白がることができる。

本稿は、第一章で 19 世紀の出版産業を概観、第二章で 19 世紀の作家ポーのジャーナリスト的な側面を指摘、第三章でそんなポーの個々の作品を考察、第四章でそれまでの考察で分かった社会通念の変化を軸に現代の「ポスト・トゥルース」現象を再考する、という構成になっている。このような構成にしたのは、ポーの作品群への考察を通して 19 世紀と 21 世紀の社会の類似点と価値観の相違を体感的に「わかって」もらえると思ったからだ。

筆者にとってポーの小説は、素直に読んで面白い作品とは言えなかった。現代の小説なら登場人物に感情移入できるよう配慮されているものだが、ポーの作品にはそれがないし、何より作品が伝えようとするメッセージが無いように思えた。しかし、オースターやブラッドベリといった他の作家との関連づけて読み返すうちに、楽しみ方がわかるようになった。オースター作品を読んでその不条理な世界とメタフィクション性を楽しんだり、ブラッドベリ作品を読んで科学技術に幻想を託して面白がったりするのと同じように読めばいい。それはどういうことかといえば、ポー作品を私たちにとって縁遠い「ゴシック」の枠の中で解釈するのではなく、近代的自我とその揺らぎや、科学技術を扱った現代的な（「モダン」な）作品として読み直すということだ。そうやって読むとポー作品が身近に感じられただけでなく、ポー自身と、彼の生きた 19 世紀という時代に親近感に似た興味を覚えるようになった。調べていくうちにポーが当時としてはどれだけ奇妙で先進的な作家であったかがわかってきた。

それと同時に、19 世紀が新聞・雑誌・小説というメディアを生んだ混乱の（そして奇妙で面白い）時代であったこともわかった。都市化で人口が集中し、治安や公衆衛生が悪化して社会不安が膨れ上がったとき、「ハサミとノリ」でコラージュされたいかがわしい新聞が人々に娯楽を提供した。現代のフェイクニュースとよく似ているなと思って文献をあたっているうちに、歴史上何度も起こったパラダイムシフトのことが「わかって」きて、本稿のテーマが決まった。ポーの作品を読むことがなければ、この気づきはなかっただろう。

文学作品を、当時の社会問題や私たちの価値観のシフトを映し出すものとして読み直すのがこれほど楽しいとは思わなかった。自分が好きになれない作品でも、この方法なら面白がることができる。それは現代の映画・アニメ・ゲームを理解し楽しむためにも有用だし、多分、自分と異なる意見を持つ人とうまくつき合っていくためにも大事な姿勢なのではないかと思う。

ポーの「観察者」の目を借りて社会を眺めれば、押し寄せる変化の波も楽しむことができるはずだ。

引用文献

Scholes, Robert. *Element of Fiction.* New York: Oxford University Press, 1981

アンダーソン、ベネディクト『増補 想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや訳、書籍工房早川、1997 年

ウィルソン、コリン「ポーを魅了したミステリー、メアリー・ロジャーズ事件」『殺人の迷宮』中山元、二木麻里訳、青弓社、1994 年 pp.10-20

岡田斗司夫『評価経済社会　ぼくらは世界の変わり目に立ち会っている』ダイヤモンド社、2011 年

河合雅司『未来の年表　人口減少日本でこれから起きること』講談社、2017 年

グッドマン、マシュー『トップ記事は、月に人類発見！　十九世紀、アメリカ新聞戦争』杉田七重訳、柏書房、2014 年

堺屋太一『知価革命――工業社会が終わる 知価社会がはじまる』PHP 研究所、1990 年

巽孝之「年譜」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』新潮社、2009 年 pp.277-278

トフラー、アルビン『第三の波』徳岡孝夫監訳、中央公論新社、1982 年

津田大介、日比嘉高『「ポスト真実」の時代 「信じたいウソ」が「事実」に勝る世界をどう生き抜くか』祥伝社、2017 年

パリス、ジャン『空間と視線――西欧絵画史の原理』岩崎力訳,美術公論社,1979 年,pp48-49

ポー、エドガー・アラン「赤き死の仮面」『黒猫・アッシャー家の崩壊　ポー短編集Ⅰゴシック編』巽孝之訳、新潮社、2009 年 pp29-41

―――「アッシャー家の崩壊」『黒猫・アッシャー家の崩壊　ポー短編集Ⅰゴシック編』巽孝之訳、新潮社、2009 年 pp153-191

―――「黒猫」『黒猫・アッシャー家の崩壊　ポー短編集Ⅰゴシック編』巽孝之訳、新潮社、2009 年 pp7-27

―――「群衆の人」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』巽孝之訳、新潮社、2009 年 pp118-136

―――「軽気球夢譚」『ポオ小説全集　３』高橋正雄訳、東京創元社、1974 年 pp305-322

―――「盗まれた手紙」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』巽孝之訳、新潮社、2009 年 pp77-115

―――「マリー・ロジェの謎」『ポオ小説全集　３』丸谷才一訳、東京創元社、1974 年 pp146-213

―――「モルグ街の殺人」『モルグ街の殺人・黄金虫　ポー短編集Ⅱミステリ編』巽孝之訳、新潮社、2009 年 pp.7-75

野田啓子、山口ヨシ子『ポーと雑誌文学――マガジニストのアメリカ』彩流社、2001 年 p.18

山田登世子『メディア都市パリ』青土社、1991 年

渡辺利雄『講義 アメリカ文学史 入門編』研究社、2011 年